

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 140

統語と意味のインターフェイスをめぐって

—カートグラフィーの射程—

森 芳樹 編

一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 140

Schnittstelle der Syntax und Semantik
Reichweite der Kartographie

Herausgegeben
von
Yoshiki MORI

JGG Tokyo

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任されています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussionsinhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

目次

| | | |
|-----------------------------------|----------|----|
| まえがき | 森 芳樹 | 1 |
| ドイツ語の事実性補文の統語構造 | 伊藤克将 | 4 |
| ドイツ語の分裂文における人称代名詞と語順の統語構造 | 山崎祐人 | 15 |
| PP と CP の並行性：shadow-P の語順と文ムード | 藤井俊吾 | 30 |
| 半法助動詞としての <i>drohen</i> の意味解釈 | 岡野伸哉 | 43 |
| ドイツ語 <i>schon</i> に基づいた日本語「もう」の分析 | 宮田瑞穂・森芳樹 | 58 |
| 会議報告 | | 73 |

Inhalt

| | | |
|--|------------------------------|----|
| Vorwort · · · · · | Yoshiki MORI | 1 |
| Zur syntaktischen Struktur des faktiven Komplementsatzes im Deutschen · · · · · | Katsumasa ITO | 4 |
| Die syntaktische Struktur der Spaltsätze im Deutschen - Personalpronomen und Wortstellungsvariationen · · · · · | Yuto YAMAZAKI | 15 |
| Die Parallelität der PP und der CP: Schatten-Präpositionen und Satzmodi · · · · · | Shungo FUJII | 30 |
| Zur Semantik von <i>drohen</i> als Halbmodal · · · · · | Shinya OKANO | 43 |
| Eine Analyse des japanischen Adverbs <i>mô</i> basierend auf <i>schon</i> · · · · · | Mizuho MIYATA & Yoshiki MORI | 58 |
| Diskussion · · · · · | | 73 |

まえがき

森 芳樹

叢書『統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程—』をお届けする。Rizzi (1997)および Cinque (1999)以降、カートグラフィー分析は変形生成文法において重要な役割を果たしてきた。カートグラフィー分析の特徴として、従来は単一とされてきた機能範疇を精緻化していくことでより正確な統語記述を志向する姿勢や、言語の普遍的な構造の解明を目標とすることが挙げられる。また統語地勢図に文と談話の意味を書き込むことにも、その特性を見てとることが出来る。近年、カートグラフィー分析はドイツ語に関する研究においても多くの成果を上げてきている。例えば、Frey (2004)では前域、Grewendorf (2005)ではスクランブリング (かき混ぜ)、Bayer (2012)では心態詞といったテーマが取り上げられており、左方領域を機能毎に分割するアプローチによってそれぞれの現象における統語論—意味論インターフェイスのあり方が提案されてきた。しかしながら、統語地勢図に文と談話の意味を書き込むアプローチには問題点もあることが指摘されており、例えば Ernst (2009)では、Cinque (1999)の提案する IP 領域のカートグラフィーでは副詞の語順を正しく予測することができないことが示されている。個別の事象をつぶさに観察していく中で、カートグラフィー分析の枠組みで想定される左方領域の普遍的な構造がどこまで維持できるかが、今後の研究上の課題となると考えられる。

本書は2019年6月9日に学習院大学目白キャンパスにおいて開催された日本独文学会春季研究発表会におけるシンポジウム『統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程』を基としている。シンポジウムでは、ドイツ語において左方領域に関わる現象を取り上げ、カートグラフィー分析が約束している自らの特性の一つ、すなわち統語と意味の明瞭な対応関係を明示化するという理論的指針がどの程度維持できているかを検証した。シンポジウムで発表を行った伊藤克将、山崎祐人、藤井俊吾、岡野伸哉の論文に加え、宮田瑞穂 & 森芳樹の寄稿した論文によって本書は構成されている。

カートグラフィー分析の強みは談話構造に関わる統語現象に関して明確な予測を立てる分析を提供できる点にある。つまり統語と意味・談話の一貫した対応を前提にすることで、統語論のみの観点、或いは意味論のみの観点からでは合理的な説明を与えることが困難な現象に関しても、説明力の高い分析を行うことが可能である。伊藤はドイツ語の事実性述語に埋め込まれた補文を取り上げ、カートグラフィー分析を用いてその特異な性質を分析した。言表動詞とは異なり、

事実性補文内からの付加詞である *w* 句の抜き出しや事実性補文の項の話題化は不可能であることが知られている。伊藤は Haegeman (2014) による事実性演算子を用いた分析に修正を加え、介在要素となる統語素性を想定することで、事実性補文内からの抜き出しや話題化に関する正確な予測を立てることに成功した。伊藤の分析の優れた点として、*w* 句の抜き出しという純粹に統語的であるとみなされがちな現象や、話題化という談話に深く関わる現象、そして事実性補文という統語的観点からではその特質性を定義しがたく思われる構造を一貫した道具立てによって合理的に説明した点が挙げられる。

次に、山崎は分裂文の統語構造を扱った。分裂要素が人称代名詞である場合、*es ist er/sie...* となるような語順は先行研究では非文とされてきたが、コーパスに基づきそのような例も少なからず存在することを示した。さらに、分裂文が意外性の意味を表現する場合、主語として現れる要素が固有名詞か人称代名詞かによって語順が異なることを明らかにした。条件の異なる文脈におけるそれぞれの文の容認性を検討することで、それぞれの分裂文の語順の持つ意味的性質を明らかにし、意外性・非意外性の意味が人称代名詞の軽重から導かれるような、分裂文の統語的分析を新たに行ったのである。意外性・非意外性という意味論的性質と分裂文の語順という統語的性質の間の対応に、分裂要素の形式も関わるという、カートグラフィーの詳細に立ち入る分析を示した論文である。

以上の二稿では CP 単位の現象が取り上げられたが、藤井は PP に CP 分離仮説を適用する分析の妥当性を検討した。ドイツ語では方向を規定する前置詞句が形態素 *r-* を伴う *shadow-P* と呼ばれる前置詞と共に現れることがあるが、この二つの前置詞 (句) の可能な語順は文モードによって異なる。前置詞命令文では *shadow-P* が前置される語順のみが容認され、平叙文の中では逆に *shadow-P* が後置される語順のみが容認されるが、動詞命令文では両方の語順が可能であることを示した。藤井は、各文モードにおける前置詞句の語順に関するこのような事実を、PP が独自の *ForceP* を有すると想定することで説明した。

ここまでは統語と意味の明瞭な対応関係を維持できるような方向性が強調されるが、岡野論文はそのような方向性の限界を指摘している。いわゆる半法助動詞である *drohen* を取り上げ、その意味的性質を詳細に検討することで、証拠性を担う機能範疇を用いて行う統語的な分析の問題点を示すのである。具体的には、*drohen* には証拠的意味と時間的意味の両方が内在していることを意味論的に明らかにし、カートグラフィーの階層上において、意味との対応を維持したまま *drohen* を一箇所に位置付けることが難しいことを論じた。岡野の分析は統語構造と意味解釈が明確な一対一対応をなしていない可能性があることを示唆するものであり、カートグラフィー分析に対して重大な疑義を投げかけている。

最後に宮田と森はドイツ語の *schon* と日本語の「もう」を比較した上で、スケールという概念を導入することで「もう」の機能に一貫した説明を与えられるこ

とを示した。一見共通した性質を示すことが難しいように思われる語彙の多義性を、スケールの導入という観点から捉え直した議論であり、統語と意味の一貫した対応を標榜するカートグラフィー分析の枠組みにとって課題となりうる事実を突きつけている。とくに、アスペクトとテンスの関係は、一定の形で捉えられる側面もあれば多義性を形成する原因となっている多様な関係性に依っている側面もあることを明らかにしている。

ここまでで述べたように、本書はカートグラフィー分析の現在を統語論と意味論の双方の観点から見直し、その結果、この分析の利点と限界を明らかにするとともに、微力ながら言語理論研究に新しい問題意識と見方を提供することができたと思う。本書が議論のきっかけとなり、ドイツ語研究のさらなる発展に寄与しうるならば幸いである。

参考文献

- Bayer, J. (2012). From modal particle to interrogative marker: A Study of German *denn*. In L. Brugé, A. Cardinaletti, G. Giusti, N. Munaro, & C. Poletto, *Functional Heads: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 7*, 13-28. Oxford: Oxford University Press.
- Cinque, G. (1999). *Adverbs and Functional Heads: Across-linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Ernst, T. (2009). Functional categories and the Chinese Infl. *Linguistics* 32, 191-212.
- Frey, W. (2004). Notes on the syntax and the pragmatics of German left dislocation. In H. Lohnstein, & H. Trissler, *The Syntax and the Semantics of the Left Periphery*, 203-233. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Grewendorf, G. (2005) The discourse configurationally of scrambling. In J. Sabel, & M. Saito, *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*. 75-135. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Haegeman, L. (2014). Locality and the distribution of main clause phenomena. In E. O. Aboh, M. T. Guasti, & I. Roberts, *Locality*, 186-222. Oxford: Oxford University Press.
- Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman, *Elements of Grammar*, 281-339. Dordrecht: Kluwer.

ドイツ語の事実性補文の統語構造

伊藤 克将

1. はじめに

本稿では、ドイツ語の事実性述語（補文の内容が事実となる述語）に埋め込まれた補文の統語構造を取り上げる。事実性述語である *bedauern*、*bemerk*en、*bereuen*、*sich ärgern* などに埋め込まれた補文（事実性補文）の性質として、以下の二点を挙げるることができる。

まず、事実性補文内からは、付加詞である *w* 句の抜き出しが許されない。(1a) では、*w* 句である *wie / wann / wo* が *bereuen* に埋め込まれた補文から抜き出されているが、非文となっている。なお、(1b) が示しているように、多少容認度は下がるものの、項である *w* 句の抜き出しは可能である。

- (1) a. *{*Wie_i / Wann_i / Wo_i*} *bereust du, dass du t_i den Kuchen gegessen hast?*
b. ^(?)*Was_i bereust du, dass du t_i gegessen hast?*

主文の動詞が *sagen* などの言説の動詞であれば、補文からの抜き出しは、付加詞である *w* 句 (2a)・項である *w* 句 (2b) のいずれにおいても可能である¹。

- (2) a. ^(?){*Wie_i / Wann_i / Wo_i*} *hast du gesagt, dass du t_i den Kuchen gegessen hast?*
b. ^(?)*Was_i hast du gesagt, dass du t_i gegessen hast?*

二点目の特徴として、事実性補文内における項の話題化が不可であることが挙げられる。(3a) では、*bedauern* に埋め込まれている補文において、項の話題化が起きているが、これは非文となっている。一方、言説の動詞に埋め込まれた補文であれば、(3b) が示しているように、話題化は可能である。

- (3) a. **Er bedauert, [[den Studenten], dass den jemand geküsst hat].*
b. [?]*Er hat gesagt, [[den Studenten], dass den jemand geküsst hat].*

(Grewendorf 2013: 666)

¹ ドイツ語の補文からの *w* 句の抜き出しは、補文が VL 語順の場合は多少容認度が下がる一方、V2 語順であれば完全に容認されることが知られている（詳しくは Featherston 2004 の実験による容認度調査などを参照）。本稿では、(1b) や (2) のような完全な非文ではないデータに関しては容認可能な文として扱う。

同様の現象は英語においても観察され、多くの先行研究が存在する。このうち意味論的なアプローチを用いているものとしては Oshima (2006) や Abrusán (2011)、統語論的なアプローチを用いているものとしては Basse (2008)、Haegeman (2014)、Kastner (2015) などを挙げるができる。

本稿では、事実性補文の分析に関するこういった様々な先行研究の比較検討を行い、よりよい事実性補文の分析を提案することを目指す。最終的には、統語論的アプローチのうち、カートグラフィーの枠組みを採用している Haegeman (2014) の立場を支持しつつもその問題点を指摘し、Haegeman (2014) に修正を加えた分析を提案する。

本稿の構成は以下の通りである。まず第 2 節で、意味論的アプローチを用いた研究である Oshima (2006) および Abrusán (2011) を取り上げ、それらの問題点を指摘する。続いて第 3 節で統語論的アプローチを用いた研究である Kastner (2015)、Basse (2008)、Haegeman (2014) を取り上げ、これらに関してもやはりそれぞれ問題点があることを確認する。しかしこのうち、Haegeman (2014) に関しては修正を加えることで問題点を克服できることを第 4 節で指摘し、新たな分析を提案する。第 5 節は本稿のまとめである。

2. 意味論的アプローチ

本節では、意味論的アプローチを用いた事実性補文の研究として、Oshima (2006) と Abrusán (2011) を取り上げる。Oshima (2006) は、「事実性補文内における付加詞の *wh* 句は項である *wh* 句と異なり、唯一の答えを要求する」とした上で、事実性述語の意味によりその唯一の答えが前提 (Präsupposition) とされてしまうため、疑問文として不適切になる、という分析を提案している。具体的には、例えば (1a) のような *wie* を用いている文においては「ケーキの食べ方」が 1 通りしか想定できないため、疑問文に対する答え (Antwort) と前提 (Präsupposition) が、同一のものになってしまう。一方、(1b) のような *was* を用いている文においては、「食べたもの」が複数想定されるため、疑問文に対する答えとは別に、前提を読み込むことができる、といった分析である。

続いて Abrusán (2011) だが、彼女はまず、様態を表す英語の *how* はそのドメインに相反する様態、例えば *quickly* と *slowly* を含むと仮定する。そして、事実性補文と *how* によって形成される前提の集合が、*how* のドメインに存在する相反する様態が原因で矛盾 (Kontradiktion) を抱えたものになってしまうため、常に非文となる、という分析を提案している。

こういった意味論的アプローチは、付加詞の抜き出しに関しては説得力のある説明を提示するものの、問題点も存在する。第一の問題点として、項の話題化が禁止される理由を説明できないことが挙げられる。さらに、日本語などの顕在的な *wh* 移動がない言語において、(4) のように事実性補文内に付加詞である *wh*

句が生起することが可能であることも、意味論的アプローチにとって問題となる。

(4) 太郎は [ケーキをどう食べたことを] 後悔しているの。

意味的な分析を採用した場合、(4) のような文について、非文であるという誤った予測がなされてしまう。以上のことから、事実性補文に対して意味論的アプローチを用いることには問題があると言わざるを得ないだろう。そこで、次節以降では統語論的アプローチを検討していく。

3. 統語論的アプローチ

本節では、統語論的アプローチを用いた事実性補文の研究として、Kastner (2015)、Basse (2008)、Haegeman (2014) を取り上げる。

3. 1 Kastner (2015)

Kastner (2015) は、Kiparsky & Kiparsky (1971) を出発点に、事実性補文は DP からなると分析した。この分析では、(5) のように、CP の上に DP が想定されている。

(5) Peter bereut, [DP [CP dass er den Kuchen gegessen hat]].

付加詞である *w* 句の抜き出しが禁止されることに関しては、Kastner はまず、DP が存在することにより補文が旧情報になると仮定する。その上で、*w* 句は旧情報とはなり得ないため非文となる、という分析を提案している。この場合、項である *w* 句の抜き出しも禁止される（正確には、事実性補文内における *w* 句の基底生成そのものが禁止される）という誤った予測がなされるが、これは「VP 補部に生成された項は新たな談話指示物になることができる」という Irwin (2012) の提案を採用することで回避している。一方、項の話題化が禁止される理由は、事実性補文には TopicP が欠けているためであるとしている。

以上が Kastner (2015) の分析の概略だが、まず、Irwin (2012) は議論において主文のデータを用いており、事実性補文内においても Irwin (2012) の提案が成り立つかどうかは定かではない。さらに、DP の存在によって事実性補文が旧情報になると考えている一方で、DP 内の要素が新たな談話指示物になることを認めていることは矛盾をきたしており、説得力のある分析になっているとは言えないだろう。そこで、同じく統語論的アプローチでありつつも、全く異なった分析を提案している Basse (2008) を見ていく。

3. 2 Basse (2008)

Basse (2008) は、Chomsky (2001) のフェイズ理論を採用した上で、事実性補文の ForceP が不完全であると仮定することで、事実性補文の特異な振る舞いを説明することを試みた。フェイズ理論では、長距離間で一致 (Agree) を行うことを禁止するフェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition) が (6) のように定義されている。

(6) フェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition)

The domain of H is not accessible to operations at ZP; only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky 2001: 14)

Basse (2008) は ForceP および vP がフェイズであるとしているため、(6) に従うと、例えば (7) において vP の補部にある DP は、ForceP 主要部との一致操作が許されないということになる (ここでは ForceP が (6) における ZP に、v が (6) における H に対応する)。

(7) [ForceP Force [TP T [vP v [DP]]]]

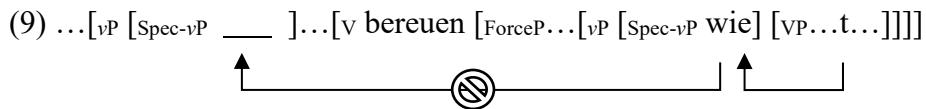


Basse (2008) はまず、英語の *regret* などの事実性述語が対格目的語を取ること根拠に、その vP が常に対格素性を持つと仮定する。このことは、(8) のようにドイツ語の *bereuen* などにおいても観察することができる。

(8) Ich bereue [DP den Streit].

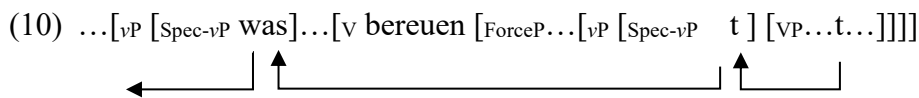
その上で Basse (2008) は、事実性補文の ForceP は不完全でありフェイズとして機能しないと仮定することで、事実性補文からの *w* 句の抜き出しに関する現象を説明することを試みている。事実性補文の ForceP がフェイズとして機能しない場合、*w* 句は主文に移動するにあたり、補文の vP 主要部と一致したあと、主文の vP 主要部と一致を行う必要がある²。そしてこのとき、対格素性を持たない付加詞の *w* 句では、主文の事実性述語が持つ対格素性との一致を行うことが出来ないため、(9) のように派生が破綻することになる。

² なおこのときの移動は、端素性 (edge feature) によるものである。また、補文の vP 指定部から主文の ForceP 指定部へと直接移動する派生は、フェイズ不可侵条件により排除される。



よって、事実性補文から付加詞である *w* 句の抜き出しが不可であることが、正しく予測される。

一方、目的語である *w* 句に関しては対格素性を持つため、主文の *vP* 主要部と一致を行うことができる。すると、(10)のように移動することが可能となり、目的語である *w* 句であれば事実性補文からの抜き出しが可能であることが正しく予測される。



なお Basse (2008) は、項の話題化が不可であることに関しては、事実性補文の *ForceP* が不完全であることから左方領域への移動が禁止されるとしている。

このようにフェイズ理論を用いることで事実性補文の性質を説明した Basse (2008) だが、Rau (2011) が指摘しているように、その分析には経験的な問題点が存在する。まず、(11a) のように、対格素性を持たない前置詞句であっても抜き出しが容認される例が存在すること、そして、(11b) のように、*sich ärgern* のような対格を取らない事実性述語でも *was* の抜き出しが容認されること、の二点である。

- (11) a. [?][Auf wen]_i bemerkt Peter, dass er immer t_i warten muss?
 b. [?]Was_i ärgerte er sich, dass er t_i verloren hatte?

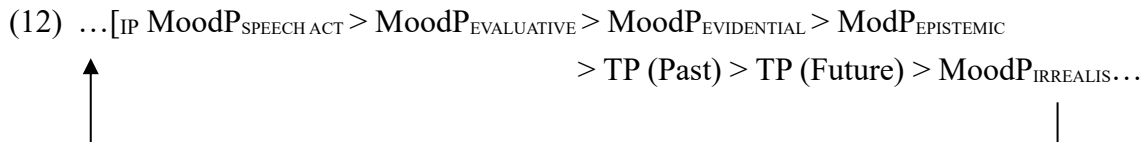
(Rau 2011: 137)

Basse (2008) の分析を採用した場合、対格素性をもつ *w* 句のみが事実性補文から抜き出すことができる、という予測がされるが、(11) のデータが示しているようにそれは誤っているのである。よって、Basse (2008) に関しても、問題があると言わざるを得ないであろう。そこで、最後に Haegeman (2014) の分析を取り上げる。

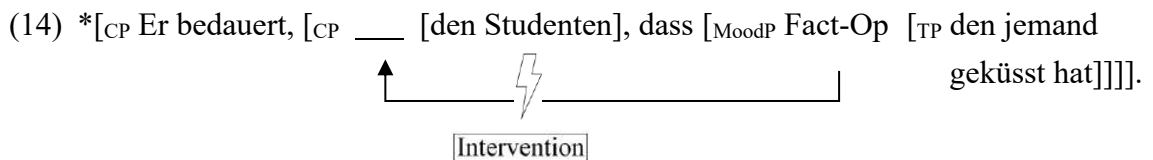
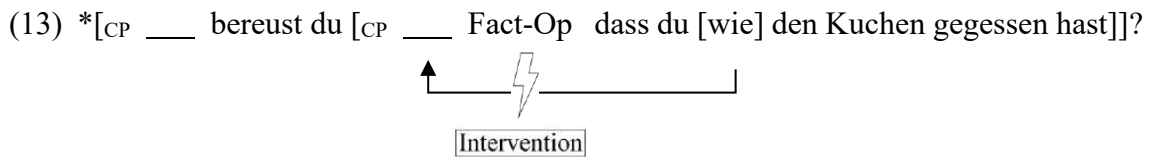
3. 3 Haegeman (2014)

Haegeman (2014) は、事実性補文内に事実性演算子を想定することで、その統

語的振る舞いを説明することを試みた。彼女はまず、Cinque (1999) の提案する副詞の階層を受け入れ、副詞は IP 領域における独自の機能範疇の指定部に生成されると仮定する。そして事実性補文内において、発音されない演算子が (12) のように MoodP_{IRREALIS} から移動しているとするので、付加詞である *w* 句の抜き出しおよび項の話題化が禁止される理由を、事実性演算子の介在効果によって説明できると主張した³。



付加詞の *w* 句が移動する際は (13) のように事実性演算子 (Fact-Op) が介在要素になり、項が話題化されている場合には (14) のように話題化された項 (*den Studenten*) が事実性演算子の移動にとっての介在要素になる。これにより、移動の局所性 (locality) に対する違反が起き非文となる、という分析である。



事実性演算子を仮定することで、付加詞の抜き出しと項の話題化が禁止される理由を同時に説明した Haegeman (2014) だが、これにも問題点が存在する。まず一つ目の問題点として、目的語である *w* 句ならば事実性補文からの抜き出しが出来ることを予測できないことが挙げられる。Haegeman (2014) は事実性演算子に [+N] という素性を想定しているが、介在効果が働くのは、移動する要素と介在要素が同種の素性を持っている場合である。すると、目的語である *w* 句の移

³ Haegeman (2014) は、事実性演算子が MoodP_{IRREALIS} の指定部に生成されていることの間接的な根拠として、メイティ語 (シナ・チベット語族) の事実性補文に用いられる補文標識が、非現実性のマーカーと同じ形態素を持つことを挙げている。事実性演算子が具体的にどこに着地するかに関しては、Haegeman (2014) では述べられていない。

動にとっても事実性演算子が介在要素となり、事実性補文から目的語である *w* 句を抜き出すことは許されないという誤った予測がなされてしまう（これは、目的語である *w* 句は名詞句として機能しているため [+N] を持つと考えられるからである）。また第二の問題点として、Haegeman (2014) は、付加詞である *w* 句の移動にとって事実性演算子が介在要素になるとしているものの、こういった素性が共通しているかまでは言及していないことが挙げられる。もし、仮に [+wh] だとすると、目的語である *w* 句の移動にとっても事実性演算子が介在要素となるため、何か別の素性が必要となる。

このように問題点もある Haegeman (2014) だが、分析において決定的な役割を果たしているのは事実性演算子の介在効果であるため、事実性演算子に想定する素性を修正することで問題点を克服することは可能であると考えられる。よって次節では、Haegeman (2014) の分析に修正を加えることで、事実性補文の振る舞いを説明できる理論を提案することを目指す。

4. 事実性演算子による分析—Haegeman (2014) の修正

本節では、事実性演算子による分析を提案した Haegeman (2014) に修正に施し、ドイツ語の事実性補文において、付加詞である *w* 句の抜き出しおよび項の話題化が禁止されることを正しく予測できる理論を提案する。

分析の修正にあたり、以下のような仮定をする。まず、機能範疇の指定部に基底生成される要素に、特定の種の機能範疇の指定部に生成されたことを示す統語素性を想定する。Rizzi (2004) によると、指定部に存在する項である要素同士、量化を行う要素同士、修飾をする要素同士は、それぞれ介在要素となるため、本稿では Rizzi (2004) の提案を統語素性に反映し、例えば主語は [+Spec_{argumental}]、*wh* 句は [+Spec_{quantificational}]、副詞は [+Spec_{modification}]、といった素性を持つとする。さらに、Miyagawa (2017) に従い、話題 (Topic) や焦点 (Fokus) などの談話に関わる要素は [+ δ] という素性を持つとする⁴。

これらを踏まえ、事実性演算子は [+Spec_{modification}]、[+ δ] の素性を持つと仮定すると、事実性補文の振る舞いを統一的に説明することが可能になる。

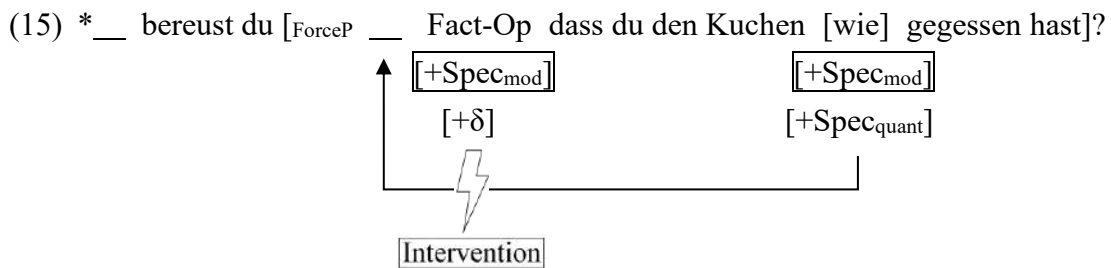
さて、実際の分析を見る前に、事実性演算子がこれらの素性を持つと仮定することに関する正当化を行う。まず [+Spec_{modification}] だが、これは Haegeman (2014) に倣い、事実性演算子の基底生成される位置を MoodP_{IRREALIS} の指定部と考えた時

⁴ Miyagawa (2017) は、Chomsky (2008) において提案された C から T への素性継承 (feature inheritance from C to T) を受け入れた上で、C における素性には人称に関わる ϕ 素性と、談話に関わる δ 素性 (discourse-configurational features) が存在すると提案し、いずれの素性が T へと継承されるかに関しては言語ごとに違いがあるとしている。Miyagawa (2017: 3) によれば δ 素性を持つのは話題 (topic) と焦点 (focus) であるが、「 δ 素性」と呼称する際には特にこの二つは区別されない。これは「 ϕ 素性」と呼称する際に特に人称が区別されないのと同様である。

点で導かれる。というのも、Coniglio (2006: 71) によれば MoodP_{IRREALIS} の指定部はドイツ語では *vielleicht* などの副詞が基底生成される位置であり、副詞は [+Spec_{modification}] を持つからである。

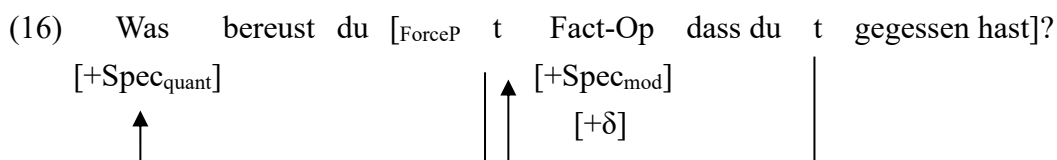
続いて [+δ] だが、事実性補文は前提 (Präsupposition) となっており情報構造上は基本的に旧情報となることを鑑みると、事実性演算子が談話に関わる素性 [+δ] を持つと仮定することは自然なことと言える。Miyagawa (2017) において談話に関わる素性 [+δ] を持つとされているのは話題 (Topik) や焦点 (Fokus) であり、これらは前提と同様に情報構造と密接に関わる要素であるためである。

それでは、実際の分析を見ていこう。まず、付加詞である *w* 句の抜き出しが不可である理由だが、これは (15) のように分析される⁵。



付加詞である *w* 句は、*w* 句であるが故に [+Spec_{quantificational}]、修飾語であるが故に [+Spec_{modification}] の素性を持つ。すると事実性演算子の持つ [+Spec_{modification}] が介在要素となるので、(15) のように付加詞の *w* 句の移動が阻害され、文が非文となることが正しく予測されるのである。

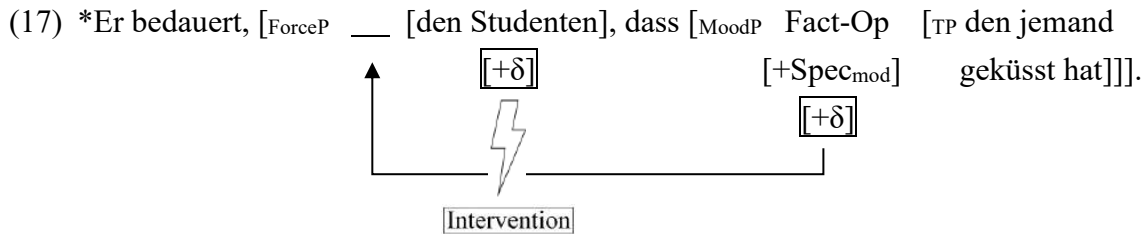
次に、目的語である *w* 句の抜き出しが可能である理由を見る。(16)で示すように、目的語である *w* 句は、*w* 句であるが故に [+Spec_{quantificational}] を持つ一方、修飾語ではないため [+Spec_{modification}] の素性は持たない。すると、事実性演算子による介在を受けることなく (16) のように移動をすることが可能となり、文が容認可能になることが正しく予測される。



最後に、項の話題化が不可である理由を見る。まず、話題化された要素はトピックであるため [+δ] を持つ。そして [+δ] をもつ事実性演算子が移動する際、

⁵ なお、(15)~(17)における [+Spec_{mod}] および [+Spec_{quant}] は、それぞれ [+Spec_{modification}] と [+Spec_{quantificational}] の略である。

(17) のように話題要素が介在要素となるため、事実性補文において項が話題化されると非文となることが正しく予測される。



以上、本節で提案した分析ならば、事実性補文において付加詞である *w* 句の抜き出しおよび項の話題化が禁止されることが正しく予測されることが示された。

5. おわりに

本稿ではドイツ語の事実性補文を取り上げ、その性質として、①事実性補文内からの付加詞である *w* 句の抜き出しが不可であること、および、②事実性補文内において項の話題化が禁止されること、の 2 点を確認した。事実性補文内に統語的な事実性演算子を想定しつつ、カートグラフィーの枠組みを採用した分析を用いることで、上記のような事実性補文の性質は統一的に説明することが可能であることを示した。

最後に、本研究の理論的貢献について述べた上で、稿を閉じることとしたい。Rizzi (1997) および Cinque (1999) に端を発するカートグラフィーは、従来は意味論・語用論の側に説明が委ねられていた現象についても統語論で捉えていくことが可能になっている。このとき重要なことは、意味論・語用論による説明以上の分析をカートグラフィーが提供できるかどうか、という点である。ある現象に対して、もし意味論・語用論による分析の方がカートグラフィーよりも優れた説明を与えることが出来るとすれば、その現象はやはり意味論・語用論に委ねられるべきだからである。本稿での議論により、ドイツ語の事実性補文は、カートグラフィーを用いた方が他の統語理論や意味理論を用いるよりも経験的に優れた分析を提示できる現象であることが確認された。このことは、統語と意味の明瞭な対応関係を前提とするカートグラフィーの経験的利点を示唆しており、これは本稿の成果であったと言えるだろう。

カートグラフィーにより統語論側の説明力が強力になったことで、意味論との境界・接点の見定めが重要な課題となっている。他の様々な言語現象に対しても、統語論で説明すべき側面と意味論で説明すべき側面を明らかにしていくことが、今後の課題として残っている。

謝辞

本稿は、2018年度に東京大学に提出した博士論文である伊藤 (2019) の第3章の一部、および日本独文学会 2019年春季研究発表会でのシンポジウム「統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程」における口頭発表に基づいている。示唆に富むご指摘をくださった参加者の方々に深く感謝したい。また藤井俊吾氏からは、本稿の草稿に対し貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝する。なお本稿は、JSPS 科研費（課題番号：JP16J08572）による助成を受けていた研究の成果の一部である。

参考文献

- Abrusán, M. (2011). Presuppositional and negative islands: a semantic account. *Natural Language Semantics*, 19(3), 257-321.
- Basse, G. (2008). Factive complements as defective phases. *Proceedings of WCCFL 27*, 54-62.
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In M. Kenstowicz (Ed.), *Ken Hale: A Life in Language* (pp. 1-52). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Chomsky, N. (2008). On phases. In R. Freidin, C. P. Otero, & M. L. Zubizarreta (Eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory* (pp. 133-166). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Cinque, G. (1999). *Adverbs and Functional Heads: Across-linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Coniglio, M. (2006). German modal particles in the functional structure of IP. *University of Venice Working Papers in Linguistics*, 16, 57-95.
- Featherston, S. (2004). Bridge verbs and V2 verbs—the same thing in spades? *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* (23), 181-209.
- Grewendorf, G. (2013). Satztypen und die linke/rechte Peripherie. In J. Meibauer, M. Steinbach, & H. Altmann (Eds.), *Satztypen des Deutschen* (pp. 652-679). Berlin: Walter de Gruyter.
- Haegeman, L. (2014). Locality and the distribution of main clause phenomena. In E. O. Aboh, M. T. Guasti, & I. Roberts (Eds.), *Locality* (pp. 186-222). Oxford: Oxford University Press.
- Irwin, P. L. (2012). *Unaccusativity at the Interfaces*. Doctoral Dissertation, New York University. New York City.
- Kastner, I. (2015). Factivity mirrors interpretation: The selectional requirements of presuppositional verbs. *Lingua*, 164, 156-188.
- Kiparsky, P., & Kiparsky, C. (1971). Fact. In D. D. Steinberg, & L. A. Jakobovits (Eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*

- (pp. 345-369). Cambridge: Cambridge University Press.
- Miyagawa, S. (2017). *Agreement beyond phi*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Oshima, D. Y. (2007). On factive islands: Pragmatic anomaly vs. pragmatic infelicity. In T. Washio, K. Satoh, H. Takeda, & A. Inokuchi (Eds.), *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI 2006 Conference and Workshops, Tokyo, Japan, June 2006, Revised Selected Papers* (pp. 147-161). Berlin and Heidelberg: Springer.
- Rau, J. (2011). *Semantic and Syntactic Differences between Finite and Infinitival Complements in German*. Doctoral dissertation, Universität Tübingen. Tübingen.
- Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman (Ed.), *Elements of Grammar* (pp. 281-339). Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, L. (2004). Locality and left periphery. In A. Belletti (Ed.), *Structures and Beyond* (pp. 223-251). Oxford: Oxford University Press.
- 伊藤克将. (2019). 『談話指向統語論によるドイツ語左方領域の研究』、博士論文、東京: 東京大学.

ドイツ語の分裂文における人称代名詞と語順の統語構造

山崎 祐人

1. 序

ドイツ語の分裂文 (der Spaltsatz) には二通りの語順が存在する (vgl. Huber 2002, Altmann 2009)。¹ 本稿では統語論の観点から、分裂要素がコプラの後ろにあるものを正置語順の分裂文(1)、分裂要素がコプラの前にあるものを倒置語順の分裂文(2)と名付ける。

(1) 正置語順

[Es] [ist] [Hans]_F, [der kommt].

Cleft Pronomen – Kopula – Cleft-Konstituente (分裂要素) – Komma – Nebensatz

(2) 倒置語順

[Hans]_F [ist] [es], [der kommt].

Cleft-Konstituente – Kopula – Cleft Pronomen – Komma – Nebensatz

同様に分裂要素が代名詞の場合においても、分裂要素がコプラの後にあるものを正置語順(3)、コプラの前にあるものを倒置語順(4)と本稿では統語論の観点から便宜上分類する。

(3) 正置語順

[Es] [ist] [er]_F, [der kommt].

Cleft Pronomen – Kopula – Cleft-Konstituente – Komma – Nebensatz

(4) 倒置語順

[Er]_F [ist] [es], [der kommt].

Cleft-Konstituente – Kopula – Cleft Pronomen – Komma – Nebensatz

分裂要素が名詞句の場合(1-2)と人称代名詞の場合(3-4)では、どのような差異が見られるのだろうか。続く第二節では名詞句の分裂文の有標性を論じた上で、Rizzi (1997) に端を発する分離 CP 仮説に基づいた統語構造を提案する。第三節

¹ 本稿では前域の *es* が前方照応として解釈され得る場合、分裂文全体が文フォーカスと解釈される場合、そして前域に副詞が生起する場合の分裂文については論じない。例文(1-4)のアノテーションは Huber (2002) に準じた。尚、下付きの F はフォーカスを表す。

では、名詞句と人称代名詞の統語的な振る舞いの差異を鑑み、名詞句の分裂文とは異なる派生の統語構造を提案する。

2. 名詞句の分裂文

2. 1 フォーカスと疑問文

情報構造上の観点から、フォーカスは主に文フォーカス(5b)、述部フォーカス(6b)、項フォーカス(7b)の三つに大別できる。

(5) 文フォーカス (Satzfokus)

a. Was ist passiert?

b. [Arno hat gegen den ANTRAG gestimmt.]_F

(6) 述部フォーカス (Prädikatsfokus)

a. Was hat Arno getan?

b. Er [hat gegen den ANTRAG gestimmt.]_F

(7) 項フォーカス (Argumentfokus)

a. Wer hat gegen den Antrag gestimmt?

b. [ARNO]_F hat gegen den Antrag gestimmt.

(vgl. Wulf 2018: 217)

上記の例文(5-7)では、それぞれのフォーカスの範囲が補足疑問文で問われているものに対応している。本稿では疑問文への応答という観点から、補足疑問文への応答として用いることが出来る場合、通常のフォーカスと見做す。Rooth (1992: 76) はフォーカスされた要素とそのオルタナティブとの対立から、フォーカスを規定した。Rooth (1992) によれば、オルタナティブは文脈上制限され得るものであり、典型的には補足疑問文との対応で考えられる(8) (vgl. Krifka 2007)。

(8) Kontext: *Der Fragesteller hat eine Teilnehmerliste durchgesehen. Darauf stehen folgende Namen: Hans, John, Mary, Francesca.*

a. Wen hast du eingeladen?

b. Ich habe HANS eingeladen.

もし分裂文におけるフォーカスが例文(5)の通常のフォーカスと同じように解釈されるならば、補足疑問文に対する応答として分裂文を用いることができると予測される。しかし、通常の質問と応答という文脈では、分裂要素が前域にある分裂文は認可されない(9b)。

(9) Kontext: *Dr. Watson ermittelt in einer Mordserie, die sich innerhalb der Familie Baskerville ereignet hat. Gestern wurden der Patriarch (Großvater), der Hausarzt und der Diensthote ermordet. Nun werden der Vater, die Mutter, die Tochter sowie zwei Söhne des Mordes verdächtigt. Dr. Watson bekommt einen Brief von Holmes. In diesem steht Folgendes:*

Holmes: (...) Ich habe jetzt herausgefunden, wer der Täter ist. Wer es ist?

a. Es ist **die Tochter**, die eine Serie von Morden begangen hat.

b. ??**Die Tochter** ist es, die eine Serie von Morden begangen hat.

Wie du bereits vermutet hattest, hatte sie schon seit Langem den kühnen Plan geschmiedet, sich das Erbe unter den Nagel zu reißen. (...)

質問に対する答えとして用いられない点で、(9b)の分裂文はそのフォーカスが有標であると考えられる。ただし、ここでは、「容疑者」という当該文脈で問題になっている範囲から答えとなる犯人が選ばれていることに留意されたい。特殊な文脈、つまり犯人が「容疑者」の中から選ばれない場合には、倒置語順の分裂文が認可される(10b)。

(10) [Kontext: (同上)]

Holmes: (...) Ich habe jetzt herausgefunden, wer der Täter ist. Wer es ist?

a. ??Es ist **der Hausarzt**, der eine Serie von Morden begangen hat.

b. **Der Hausarzt** ist es, der eine Serie von Morden begangen hat.

Er hat sich mit dem Gerichtsmediziner zusammengeschlossen, um seinen Tod vorzutäuschen. Die Sterbeurkunde ist fehlerhaft. Ein Drahtzieher innerhalb der Familie Baskerville, der das Szenario entworfen hat, hat sich mit ihnen verschworen, um an das Erbe zu kommen, ohne sich dabei die Hände schmutzig zu machen. (...)

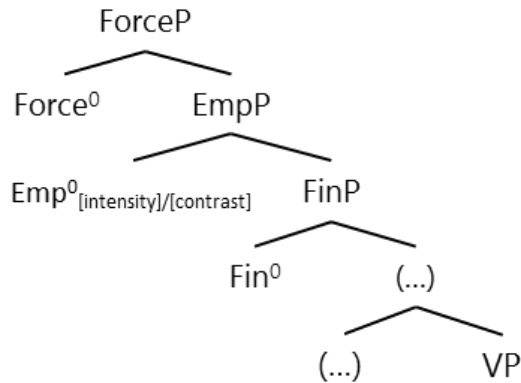
以上の観察から、倒置語順の分裂文(9b, 10b)のフォーカスは「意外性」として位置付けることができる (vgl. Zimmermann 2008)。分裂文の語順とフォーカスの性質は相補分布をなしており、容疑者の中から選ぶ場合は正置語順の分裂文(6a)、容疑者の中から選ばない場合は倒置語順の分裂文(10b)が認可される。対して、それぞれ互いに相容れない文脈では認可されない(9b, 10a)。

2. 2 分離 CP 仮説

本節では Trotzke (2017) の提案するドイツ語の左方領域の統語構造を紹介し、後述する EmpP[intensity]という機能範疇を名詞句の倒置語順の分裂文に応用する。Trotzke (2017) はドイツ語における前置されたフォーカス(Focus Fronting)の

現象²を捉えるために、EmpP (*Emphasis Phrase*) を提案した。

(11)



Trotzke (2017) によれば、前置された構成素は文脈に応じて対照的な解釈 (EmpP[contrast]) か意外性の解釈 (EmpP[intensity]) を帯びる。EmpP 指定部に前置された構成素が EmpP[contrast]³の解釈を帯びた場合、フォーカスを置かれた要素と対立するオルタナティブを明確に否定する以下のような文の対照的な解釈を正しく予測する(vgl. Trotzke 2017: 144)。

(12) GRÜN wird Maria die Tür streichen (und nicht rot).

(Trotzke 2017: 137)

EmpP 指定部に前置された構成素が EmpP[intensity]の解釈を帯びた場合、以下のような文の意外性の解釈を正しく予測する(vgl. Trotzke 2017: 244) 。

(13) Kontext: *Jeder weiß, dass Steffi Graf mit Abstand die erfolgreichste Tennisspielerin*

² Rizzi (1997) に基づく分離 CP 仮説では Focus Fronting された要素は FocP の位置を占め、通常のフォーカスにはない対照的な解釈が付与される (ib) (vgl. Cruschina & Remberger 2017: 504)。

(i) a. Ho invitato Angelica.

haben.1SG eingeladen Angelica

‘Ich habe Angelica eingeladen.’

b. [_{FocP} [_{DP} ANGELICA]i [_{Foc⁰} [_{FinP} ho invitato ti]]].

‘Ich habe Angelica eingeladen (nicht Francesca).’

³ EmpP[contrast]はFrey (2006: 254) のKontrPに対応している。

(i) [CP [C' [KontrP [Kontra' [FinP [Fin' [TopP [Top']]]]]]]]

KontrP指定部の要素は中域に生起することができない (vgl. Frey 2006: 257)。

(ii) a. UNfreundlich hat Otto sehr oft gewirkt.

b. weil UNfreundlich hat Otto sehr oft gewirkt.

c. *Otto hat UNfreundlich sehr oft gewirkt.

d. *weil Otto UNfreundlich sehr oft gewirkt hat.

der Welt ist. Wie hat denn Steffi Graf im Turnier gespielt?

- a. VERLOREN hat sie!
 - b. Sie hat VERLOREN!
 - c. #GEWONNEN hat sie!
 - d. Sie hat GEWONNEN!
- (Trotzke 2017: 17-21)

当該文脈では「勝つこと」が期待されているために、(13a)は認可される一方、(13c)は認可されない。ただし、通常のフォーカスは聞き手に要求されている情報の欠落を埋めるために用いられるために、(13b, d)は認可される。

EmpP[*intensity*]のもうひとつの主眼は分離前綴りにある。Trotzke (2017) は語彙的な対立がある場合に EmpP[*contrast*]を想定する一方(14)、語彙的な対立では捉えられない場合には EmpP[*intensity*]を想定することで(15)、前置という現象に関して統語的に統一的な説明を可能にした。つまり、(15)では *raus* に対応する *rein* は *schmeißen* の前綴りにはならないため、(14)のような語彙的な対立として分析することができない。尚、(15)では 2014 年の FIFA ワールドカップでの番狂わせが「意外性」のフォーカスによる前置を引き起こす文脈となっている。

(14) (*ab* ↔ *zu*)

Nein, nicht ab muss er nehmen, sondern zu.
(Müller 2002: 276)

(15) (*raus* ↔ *rein*)

Stell Dir vor! RAUS hat Costa Rica die Engländer geschmissen!
(Trotzke 2017: 63)

2. 3 統語構造

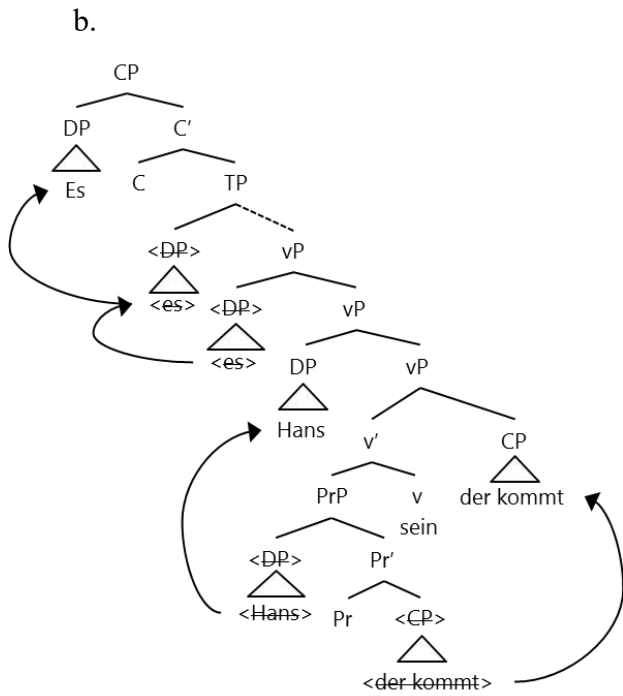
分裂文の統語構造の派生に関しては主に Fiedler (2014: 156-160) の分析に依拠して、以下のように想定する。まず分裂要素は *small clause* である PrP (*Predicational Phrase*, vgl. Hartmann 2016)の指定部に基底生成する。副文は PrP の補部に基底生成されて枠外配置され、格のチェックのために分裂要素は vP に移動する。ドイツ語ではコプラは二つの要素を要求するために、代名詞 *es* が必要となり、vP に基底生成する。主語と動詞の一致の関係を確立するために、T 主要部が探索子として主語を求め、 ϕ 素性不完全の代名詞 *es* ではなく、分裂要素を標的として見つける。主語との一致とは別に、一番高い位置にある代名詞 *es* は EPP によって TP 指定部に上昇する。正置語順の分裂文の場合、代名詞 *es* は

さらに Formal Movement⁴によって CP 指定部に移動する。倒置語順の分裂文の場合、Fiedler (2014)は分裂要素が FocP 指定部に位置すると分析しているのに対して、本稿ではそれが EmpP[intensity]指定部に位置すると分析する。Rizzi (1997) の FocP や Frey (2006) の KontrP に代表されるように、従来の対照的なフォーカスの定義はフォーカスされた要素がオルタナティブを否定することにあつた(vgl. Krifka 2007)。しかし既に例文(9-10)で観察したように、オルタナティブの否定が対照的なフォーカスを認可するならば(9b)は容認されるという予測になるが、(9b)の容認度は低いために、倒置語順の分裂文の振る舞いを FocP や EmpP[contrast]では説明することができない。(10b)で観察したように倒置語順の分裂文のフォーカスは意外性の解釈を帯びるものであり、EmpP[contrast]ではなく、EmpP[intensity]に位置付けられると考えられる。そこで本稿では、正置語順の分裂文では TP より下に分裂要素が止まるのに対して、倒置語順の分裂文の統語構造では左方領域の EmpP[intensity]に分裂要素が移動すると想定し、以下のような名詞句の分裂文の統語構造⁵を提案する(16-17)。

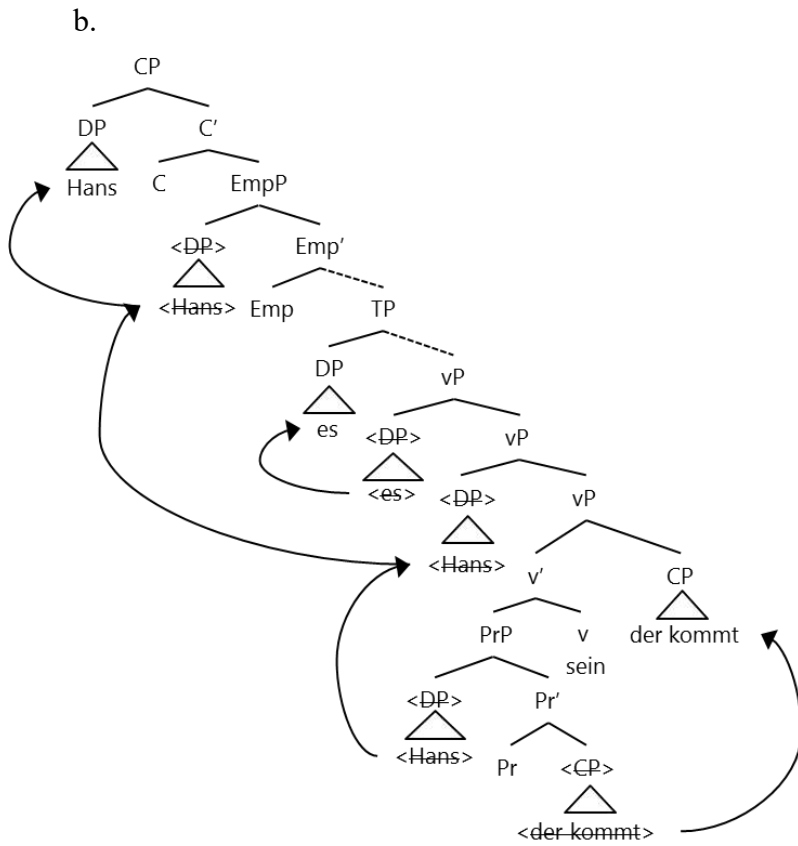
(16) a. Es ist Hans, der kommt.

⁴ TP から CP への移動は Formal Movement (vgl. Fanselow 2002) によって生じる。この操作はドイツ語において、構造上中域の最も上の要素が前域を埋めるという主文の C に結びついた EPP の要請を満たすためだけのものであり、意味・語用論上の変化をもたらさない形式的な移動である。尚、基底生成やかき混ぜによって前域が埋められる場合にはこの操作は発生しない (vgl. Frey 2006)。

⁵ 本論に関わりのない移動に関する記述は省く。また、small clause の分析に関して Fiedler (2014) は Hartmann (2016) とは異なり、É. Kiss (1999) の Focus Phrase に依拠していること、本稿では Fiedler (2014) に従って vP への付加部として扱っている枠外配置の問題などについては、紙幅の関係上これ以上立ち入らない。



(17) a. Hans ist es, der kommt.



3. 人称代名詞の分裂文

3. 1 データ

統語論における先行研究では、人称代名詞の正置語順の分裂文は明確に非文とされてきた(18-19)。

(18) *Es ist er, der kommt.
(Huber 2002:78)

(19) [...] *weil es ich bin, der es getan hat.
(Grewendorf & Poletto 1991: 199)

上記の先行研究の言及に関して、たしかに計量的な観点からは倒置語順(4)が正置語順(3)を圧倒しているものの、IDS-Mannheim の DeReKo ではその反例が見つけられる(20-22)。

(20) Es sind **sie**, die hier im Mittelpunkt stehen.
(Nordkurier, 2008, Sprung von "null Bock" in die Lehrlingswelt)

(21) Es ist **er**, der den westeuropäischen Journalisten erklärt, warum, wieso, weshalb eine Sache so ist, wie sie ist.
(Luxemburger Tageblatt, 2011, Kreditkarten, Fußballfans, Luxemburg)

(22) Es sind nicht **sie**, die auf die Strasse gehen, sondern die Tram- und Buschauffeure und die Primarlehrer.
(St. Galler Tagblatt, 2014, Erst der Anfang des Arbeitskampfes)

3. 2 疑問文への応答

2.1 節で確認したが、分裂要素が人称代名詞の場合、人称代名詞の分裂文の正置語順は意外性の解釈を帯びる際に認可される:

(23) Kontext: *Dr. Watson verfolgt einen geheimnisvollen Mord, der sich gestern im Schloss einer Gräfin ereignet hat. Ihr Mann hat ihr vor drei Jahren ein großes Erbe hinterlassen. Drei Verdächtige, darunter ihr Sohn, ihre Tochter und ihr Neffe, haben ein Alibi. Dr. Watson bekommt einen Brief von Holmes. Darin steht Folgendes: (...) Es hat sich herausgestellt, dass es einen Helfer gab. Da hakt es. Wer konnte Beihilfe zum Mord an der Gräfin leisten?*

a. ??**Sie selbst** ist es, die sich am Mord beteiligt hat.

b. Es ist **sie selbst**, die sich am Mord beteiligt hat.

c. ??Selbst Sie ist es, die sich am Mord beteiligt hat.

d. ??Sie ist es selbst, die sich am Mord beteiligt hat.

Sie hat sich mit dem Täter verschworen, damit ein gesetzlicher Erbe enterbt wird.

Sie hatte aber nicht erwartet, dass ihr ausschweifender Sohn zufällig ein Alibi haben würde. (...)

以上の観察から、名詞句の分裂文の倒置語順と人称代名詞の分裂文の正置語順は、共に意外性の解釈を持つ文脈で認可されることが確認できた。

3. 3 統語構造

本稿では、人称代名詞の分裂文の正置語順と倒置語順という二つの語順がどのような統語派生を経て実現しているのかという問いに対して、名詞句と人称代名詞の統語的な振る舞いの差異を鑑み、名詞句の分裂文で導入した Trotzke (2017)の EmpP[intensity]ではなく、異なるメカニズムによる統語派生を提案する。具体的には、人称代名詞の倒置語順の分裂文にはコプラ動詞においてドイツ語全体に適用される代名詞の語順の制約 (vgl. Grewendorf & Poletto 1991) を適用し、人称代名詞の正置語順の分裂文には Müller (2001) の Strong Pronoun についての考察を援用し、それぞれの統語構造を提案する。

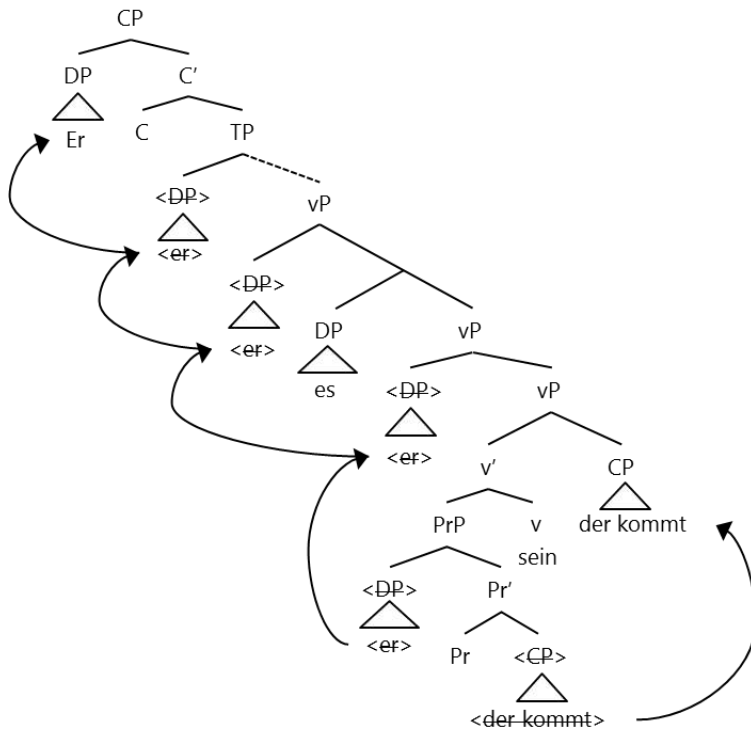
3. 3. 1 人称代名詞の倒置語順の分裂文

本稿では、名詞句と代名詞の統語上の振る舞いの差異を鑑み、名詞句の分裂文とは異なる統語派生を提案する。先ず vP に代名詞 *es* が併合する時点までは、人称代名詞の倒置語順の分裂文の統語派生は名詞句の正置語順の分裂文(13)に準ずると想定する。ただし実際の人称代名詞の倒置語順の分裂文の語順を鑑みるに、人称代名詞の倒置語順では分裂要素である代名詞が代名詞 *es* に先行する移動をいずれかの段階に用意する必要がある。そうしなければ、名詞句の正置語順の分裂文のように代名詞 *es* が前域に上昇し、人称代名詞の倒置語順が派生できなくなってしまうからである。

Grewendorf & Poletto (1991: 199) は、コプラ動詞において代名詞 *es* が同格の代名詞に先行しないというドイツ語全体における制約によって人称代名詞の分裂文の倒置語順が派生されると想定している。本稿では Grewendorf & Poletto (1991: 199) の想定に準じて、人称代名詞の倒置語順の場合、代名詞 *es* が併合された際に ϕ 素性完備の *er* が上に再配列されるという仮定を追加する。代名詞 *er* は EPP によって TP 指定部、さらに CP 指定部に移動する。vP における代名詞 *er* と *es* の入れ替えは確かに一つの追加の仮定に過ぎないが、先行研究においても、人称代名詞の分裂文におけるこの種の追加の想定は避けられない問題として残っている (Huber 2002: 79, Fiedler 2014: 160)。

(24) a. Er ist es, der kommt.

b.



3. 3. 2 人称代名詞の正置語順の分裂文

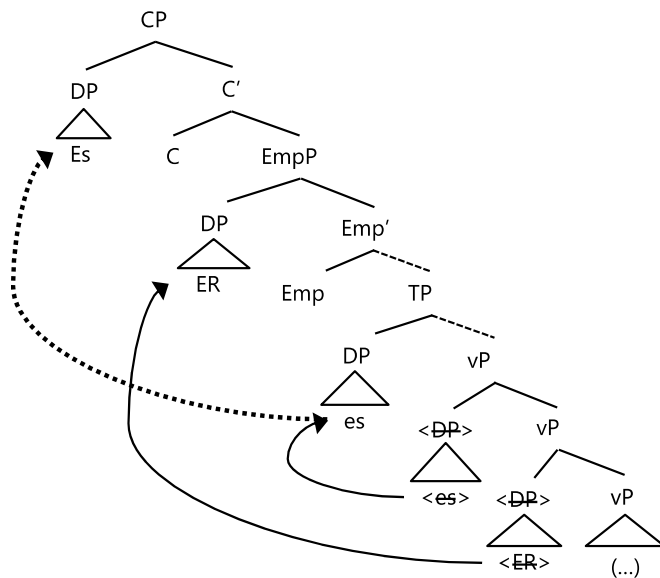
ここでは先ず、名詞句の倒置語順の分裂文の統語構造において用意した **EmpP** という機能範疇が人称代名詞の正置語順の分裂文にも適用可能と仮定する分析の是非を検討する。その分析の問題点を明らかにした後、解決策として、**EmpP** を用いない本稿の分析を提示する。

人称代名詞の正置語順の分裂文の統語構造が名詞句の倒置語順の分裂文のように派生すると想定した分析を検討してみよう。TP までの派生は名詞句の正置語順の分裂文と同じと仮定し、さらに **EmpP** に分裂要素である代名詞 *er* が移動すると想定した場合、実際の人称代名詞の正置語順の分裂文を導くためには、代名詞 *es* が vP の位置から分裂要素を飛び越えて CP 領域の一番上まで到達しなければならない。例文(25b)では破線で示したこの移動に関して、問題点が二点ある。名詞句の倒置語順の分裂文では **EmpP** の分裂要素をそのまま CP の一番上に **EPP** で上げる移動を想定しているため、名詞句の倒置語順の分裂文では生じる移動が人称代名詞の正置語順の分裂文では生じず、別の動機付けを要求することになる。これは **EmpP** を想定するこれまでの統語構造との兼ね合いという点から問題である。また、人称代名詞の倒置語順の分裂文では既に分裂要素である代名詞 *er* が代名詞 *es* に先行する語順を派生するために、本稿では vP での代名

詞間の再配列という特殊な操作を設けている。人称代名詞の倒置語順の分裂文では EPP で TP から CP へ分裂要素を移動させたが、移動の性質上、この操作では分裂要素より下の代名詞 *es* を動かすことは出来ない。そのため vP での代名詞間の再配列という名詞句の分裂文では想定しなかった追加の操作に加えて、さらに代名詞の正置語順の分裂文専用の移動を用意しなければならないが、その動機付けが難しい。つまり EmpP を備えた例文(25b)において、破線の移動はこれまでの統語構造の派生と折り合いがつかず、この特殊な語順を導くためだけに動機付けの難しい追加の想定⁶が必要となってしまう。

(25) a. Es ist er, der kommt.

b.



上記の分析の解決策として、本稿ではまず Müller (2001) の Strong Pronoun を導入する。Müller (2001) によれば、例文(26-29)に見られるように、強いアクセントが置かれた Strong Pronoun (29) はいわゆる Wackernagel Position への移動⁷に関する

⁶ 2019 年独文学会春季発表会の質疑応答にて、人称代名詞の正置語順の分裂文の派生において EmpP を想定する場合のデメリットについて質問をいただいた。例文(25)で示した通り、EmpP を名詞句の倒置語順の分裂文だけではなく人称代名詞の正置語順の分裂文にも想定する分析には、動機付けの難しい追加の想定が必要になるという問題点がある。当該発表並びに本稿では、EmpP を人称代名詞の正置語順の分裂文には想定せず、人称代名詞の倒置語順と正置語順の分裂文の派生において、代名詞の語順の制約によって vP での代名詞の再配列が倒置語順では行われ、分裂要素が Strong Pronoun であるために制約を免れている正置語順では再配列が行われないという仮定を追加した。

⁷ Müller (2001) は Wackernagel Movement は TP が完成する前に生じるものであり、かきませのように素性駆動のものではなく、代名詞専用の移動であると論じている。本稿の論旨において Strong Pronoun のみが低い位置に止まることができるという観察が重要であるため、こ

る義務性の点で他の代名詞(26-28)と一線を画している (vgl. Anagnostopoulou 2008)。

- (26) a. daß ihr₁ der Fritz gestern t₁ ein Buch geschenkt hat
b. *daß der Fritz gestern ihr₁ ein Buch geschenkt hat

- (27) a. daß sie₁ der Fritz gestern der Maria t₁ geschenkt hat
b. *daß der Fritz gestern der Maria sie₁ geschenkt hat

- (28) a. daß es₁ der Fritz gestern der Maria t₁ gegeben hat
b. *daß der Fritz gestern der Maria es₁ gegeben hat

- (29) a. ?*daß IHR₁ der Fritz gestern t₁ ein Buch geschenkt hat
b. daß der Fritz gestern IHR₁ ein Buch geschenkt hat
(Müller 2001: 209f.)

重要な点は、強いアクセントが置かれたStrong Pronoun (29)は他の代名詞(26-28)と異なり、低い位置に止まるということである。本稿では、このStrong Pronounの振る舞いは目的語だけではなく、コプラにおける主格においても保持されると仮定する。人称代名詞の分裂文の正置語順の場合、文副詞を人称代名詞の後ろに置くと非文になることから(30)、正置語順の分裂要素は左方領域ではなく低い位置 (vP) にあると考えられる。Strong Pronoun (29)と同様、コプラと分裂要素の間に副詞類が生起するため、低い位置の想定は裏付けられる (26-28)。

(30) *Es ist **er** schließlich, der kommt.

(31) Es sind **schließlich** sie, die die Steuerausfälle von einer Milliarde pro Jahr für die schwarz-gelbe Hotelsause ausgleichen müssen.
(Hannoversche Allgemeine, 2010, Anstößig)

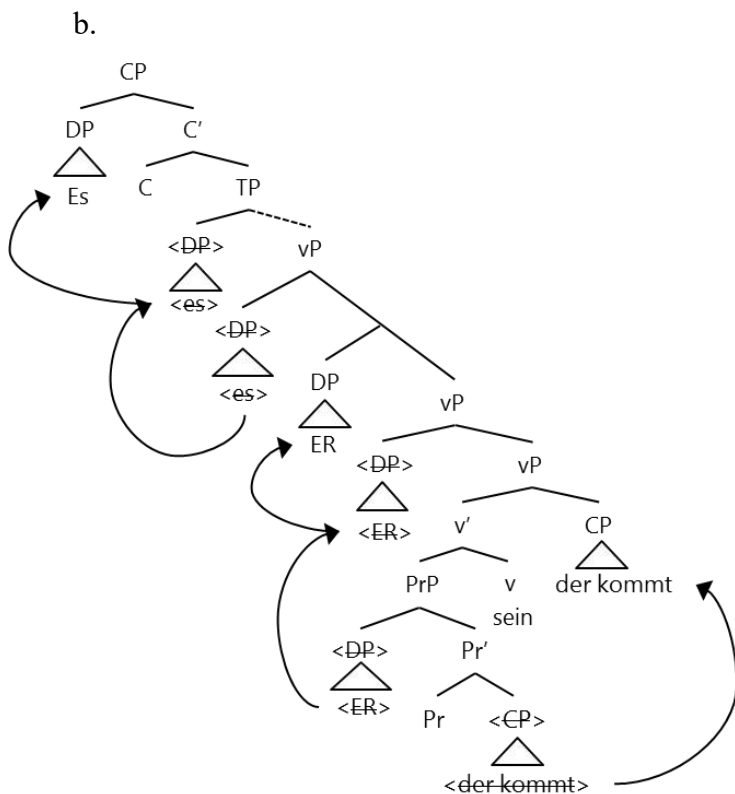
(32) Immerhin sind die Patienten nicht nur die Hauptleidtragenden des derzeitigen Bummelstreiks, es sind **auch** sie, die über die jüngst beschlossenen Änderungen bei der CNS bereits ihren Beitrag zur Lösung des Finanzierungsproblems der Gesundheitsversorgung leisten.
(Luxemburger Tageblatt, 2010, Frontkämpfer und andere...)

れ以上詳しい議論には立ち入らない。

(33) Es sind **immer** sie, die eine Stadt ausmachen.
 (Niederösterreichische Nachrichten, 2014)

これまでの観察から、人称代名詞の正置語順の分裂文の分裂要素の統語的な位置が Müller (2001) の Strong Pronoun と同様に低いことが確認できた。人称代名詞の倒置語順の分裂文ではコプラ動詞における代名詞の語順の制約を想定したが、人称代名詞の正置語順の分裂文では Strong Pronoun の語彙的な性質によってこの制約を免れていると想定する。そのため分裂要素の人称代名詞は vP で格をチェックした後は vP で *es* が併合された際にも *es* よりも下の位置に止まり、人称代名詞の倒置語順のような vP での再配列は生じないと想定する。その後、TP 指定部の代名詞 *es* が CP 指定部まで EPP によって上昇する。正置語順の人称代名詞の分裂文の分裂要素は低い位置に止まっており、名詞句の分裂文の場合とは異なり、EmpP という機能範疇は人称代名詞の正置語順の分裂文の派生には関与しない。

(34) a. Es ist er, der kommt.



4. 結語

Rizzi (1997) 以来の従来型の分離 CP 仮説からの新たな展開として、本稿では

先ず Trotzke (2017) によって提唱された CP 領域の EmphasisP を導入し、経験的なデータと共に、名詞句の分裂文の正置語順と倒置語順の統語構造を提案した。さらに人称代名詞の分裂文の分析に際しては、EmpP の適用の妥当性を論じた上で、EmpP ではなく代名詞の語順の制約を導入することによって人称代名詞の分裂文の正置語順と倒置語順の統語構造を提案した。つまり本稿の分析では、名詞句の倒置語順の分裂文と人称代名詞の正置語順の分裂文では、フォーカスの有標性という点では一致しているものの、それぞれの分裂要素が占めている位置の差は人称代名詞と名詞句の差異に帰せられることとなる。ただし統語構造の派生において、代名詞間のヒエラルキーによる再配列は一つの仮定に過ぎず、今後の研究が俟たれる。

謝辞

本稿は、日本独文学会 2019 年春季研究発表会でのシンポジウム「統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程」における口頭発表に基づいている。シンポジウム中はもちろんのこと、その前後にコメントをくださった方々にこの場を借りて改めて感謝したい。とりわけ伊藤克将氏からは、草稿の段階で詳細かつ的確な助言をいただいた。ここに記して心からの謝意を表す。

Literatur

- Altmann, H. (2009). Cleft- und Pseudocleft-Sätze (Spalt- und Sperrsätze) im Deutschen. In R. Brdar-Szabó, E. Knipf-Komlósi & A. Péteri (Eds.), *An der Grenze zwischen Grammatik und Pragmatik* (pp. 13-34). Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Anagnostopoulou, E. (2008). Notes on the Person Case Constraint Germanic (with special reference to German). In R. D'Alessandro, S. Fischer & G. H. Hrafnbjargarson (Eds.), *Agreement Restrictions* (pp. 15–48), Berlin: Mouton de Gruyter.
- Destruel, E., Beaver, D. & Coppock, E. (2017). Clefts: Quite the contrary! *Proceedings of Sinn und Bedeutung 21*. [preprints]
- DeVaugh-Geiss, Joseph P., Tönnis, S., Onea, E. & Zimmermann, M. (2018). That's not quite it: An experimental investigation of (non-)exhaustivity in clefts. *Semantics and Pragmatics 11*(3). [early access]
- É. Kiss, K. (1999). The English cleft construction as a focus phrase. In L. Mereu (Ed.), *Boundaries of morphology and syntax* (pp.217-229). Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Fanselow, G. (2002). Quirky subjects and other specifiers. In I. Kaufmann & B. Stiebels (Eds.), *More than Words. A Festschrift for Dieter Wunderlich* (pp. 227-250). Berlin:

- Akademie Verlag.
- Fiedler, J. (2014). *Germanic It-Clefts: Structural Variation and Semantic Uniformity*. Doctoral Dissertation, University of California at Santa Cruz: Santa Cruz.
- Frascarelli, M. & Ramaglia, F. (2014). The interpretation of clefting (a)symmetries between Italian and German. In K. Lahousse & S. Marzo (Eds.) *Romance Languages and Linguistic Theory 2012. Selected papers from 'Going Romance' Leuven 2012* (pp. 65-89). Amsterdam: John Benjamins.
- Frey, W. (2006). Contrast and movement to the German prefield. In V. Molnár & S. Winkler (Eds.), *The architecture of focus* (pp. 235-264). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Grewendorf, G. & Poletto, C. (1991). Die Cleft-Konstruktion im Deutschen, Englischen und Italienischen. In G. Fanselow & S. W. Felix (Eds.), *Strukturen und Merkmale syntaktischer Kategorien* (pp. 174-216). Tübingen: Narr.
- Hartmann, J. M. (2016). *The Syntax and Focus Structure of Specificational Copular Clauses and Clefts*. Habilitationsschrift. Tübingen University [submitted July 2015, accepted Jan. 2016].
- Huber, S. (2002). *Es-Clefts und det-Clefts: Zur Syntax, Semantik und Informationsstruktur von Spaltsätzen im Deutschen und Schwedischen*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Krifka, M. (2007). Basic Notions of Information Structure. In C. Fréy, G. Fanselow & M. Krifka (Eds.), *Interdisciplinary Studies of Information Structure* (pp. 13-56). Potsdam: Universitätsverlag.
- Müller, G. (2001). Harmonic alignment and the hierarchy of pronouns in German. In H. J. Simon & H. Wiese (Eds.), *Pronouns – Grammar and Representation* (pp. 205-232). Amsterdam: John Benjamins.
- Müller, S. (2002). *Complex Predicates: Verbal Complexes, Resultative Constructions, and Particle Verbs in German*. Stanford: CSLI Publications.
- Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman (Ed.), *Elements of Grammar* (pp. 281-339). Dordrecht: Kluwer.
- Rooth, M. (1992). A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics*, 1, 75-116.
- Trotzke, A. (2017). *The Grammar of Emphasis. From Information Structure to the Expressive Dimension*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Zimmermann, M. (2008). Contrastive focus and emphasis. *Acta Linguistica Hungarica*, 55, 347-360.

PP と CP の並行性 : shadow-P の語順と文ムード

藤井 俊吾

1. 導入

本稿では分離 CP 仮説を前置詞句に当てはめるアプローチの妥当性を検討する。Rizzi (1997)に端を発するカートグラフィー分析では CP を機能毎に分割するアプローチ (分離 CP 仮説) により、文の意味・談話機能の統語的分析を可能にした。談話機能の分析が主眼にあるため、基本的に文 (特に主文) 単位の構造が研究の中心であった。しかし分離 CP 仮説を CP 以外の構造に当てはめることで、その統語的・意味的機能の平行性を検討する研究も存在する。前置詞句に関しては Noonan (2017) 及び Koopman (2010)や Terzi (2010)を収録する Cinque and Rizzi (2010)の論集などを挙げることが出来、名詞句に関しては Svenonius (2004)、Hiraiwa (2005)及び Koopman (2005)などが例に挙げられる。

方向を表わす PP の分析に分離 CP 仮説を当てはめることの是非を本稿で論じる。この際、主要な検討対象となるのは Noonan (2017)であり、今回特に議論の中心になるのが以下の現象である。

- (1) Sie ist [aus dem Bett] [raus]gegangen.
- (2) [Raus] [aus dem Bett]!

以上の例で示されるように、平叙文と PP 単独命令文では *raus* (本稿では Noonan 2017 に倣い shadow-P と呼ぶ) と *aus dem Bett* (同じく full PP と呼ぶ) の語順が逆転する。Noonan (2017)では PP に現れる形態的要素と CP の機能範疇との対応付けを行ったが、本稿では文ムードの違いに起因する PP の語順の違いを検討した上で PP 自体が談話機能を有する左方領域 (ForceP) を単独で持つことを示す。

本発表の構成は以下の通りとなる。2 節では Noonan (2017)の概観を行い、3 節では文ムード毎の PP の語順を分離 CP 仮説の観点から分析する。最後に結論を 4 節で述べる。

2. Shadow-P と Noonan (2017)の分析

本節では Noonan (2017)の分析を概観する。Noonan (2017)は場所及び方向を表現する PP が伴う shadow-P の音声的実現やその語順についてカートグラフィー分析を用いて説明を行った。以下の例がそれぞれ場所及び方向を表現する shadow-P の例である。

○場所を表わす PP :

- (3) Mein Kater sitzt *in der Kiste drin*. (Noonan 2017: 219)

○方向を表わす PP :

- (4) Albert sprang *auf den Tisch rauf*. (Noonan 2017: 236)

- (5) Die Kinder sind *um den Tisch drum rum* gerannt. (Noonan 2017: 233)

shadow-P は前置詞が *r-*ないし *dr-*を伴う形で現れるが、平叙文での語順は full PP>shadow-P とされる。同一の前置詞の音形が文中に二つ現れる形となるため、純粹な移動分析では以上の現象を説明することは困難である。そこで Noonan (2017)は PP に分離 CP 仮説を当てはめ、(つまり PP が左方領域を取ることを前提とし、) CP に於ける機能範疇と PP が伴う形態要素とを対応付けることで、shadow-P の音形実現と語順を説明した。

最初に Noonan (2017)の分析の前提を述べる。PP の基底生成位置は(副文と同じく)V の右側であり、派生の過程で左側へ移動する。次に CP はフェイズである(Chomsky 2001)¹ため、C head は指定部に要素を移動させる edge feature を有するが、PP の取る左方領域も edge feature を持つ。最後に、方向を表わす PP は場所を表わす PP と(着点ないし起点を含まない)方向を表わす PP から構成されると想定している。尚、方向を表わす PP を分割する想定は den Dikken (2003, 2010)や Koopman (2010)でも採用されている。

2. 1 場所を表わす PP の分析

Noonan (2017)では場所を表わす PP は場所名詞を主要部として取るとしているため、統語上は場所名詞の DP が左方領域を取る形となっている。場所を表わす PP の統語操作は次の通りである。まず full PP (3 の例では *in der Kiste*) が派生される。次に *d-*及び *r-*がそれぞれ場所名詞(PLACE)の D²及び T の主要部とし

¹ Chomsky (2001)ではフェイズ不可侵条件(Phase Impenetrability Condition)が以下の様に定義されている。

(i) Phase Impenetrability Condition

The domain of H is not accessible to operations at ZP; only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky 2001: 14)

本稿では VoiceP ないし vP 及び ForceP がフェイズであると想定する。

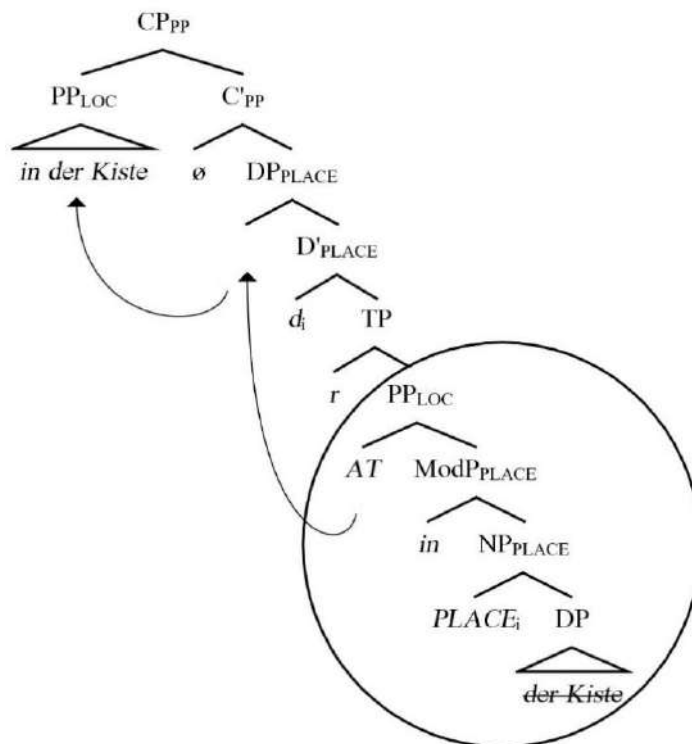
² Noonan (2017: 232)は *d-*を場所名詞の D とするのは、shadow-P を伴う場合に可能な場所の解釈が限定されているからであるとしている。以下の様に前置詞が空間的特徴付けをしないデフォルトの用法で用いられる場合(i)や、前置詞の取る名詞が容器に近い形を取る空間を形成していない場合(ii, iii)、shadow-P は出現出来ない。音形を持つ D は DP Spec を経由する full PP と Spec-head 関係を持つため、意味解釈に影響を及ぼすとしている。

(i) Ich bin in Motreal (*drin).

(ii) Das Gift ist in der Luft (*drin).

て full PP の左側に実現するが、full PP は DP Spec を経由した後、edge feature によって CP Spec に移動するために、非自立的な *d*-及び *r*-は音声的实现のために full PP の P (3 の例では *in*) と共に実現する。これによって full PP > shadow-P の語順が出来上がる。尚、*r*-³はダイクシスを表現するために(同じダイクシス表現である) T として、*d*-は定性を司る要素である(cf. *da*, *der*, *dieser*)ために D として実現すると想定する。以下は(口語に於ける) *in der Kiste drin* のツリーである。

(6) *in der Kiste drin* のツリー (Noonan 2017: 230)⁴



2. 2 方向を表わす PP の分析

方向を表わす PP の統語操作は次の通りである。まず場所を表わす PP (PPLoc) として full PP が基底生成される。この PPLoc の左に *r*-を伴う(着点ないし起点を含まない)方向を表わす PP (shadow-P)が派生される。尚、場所を表わす PP の場合とは違い、方向を表わす PP に現れる前置詞が移動後の前置詞の音声的实现ではない理由について、Noonan (2017: 234)は(7)のように shadow-P と full PP に現れる前置詞が異なる場合があるからであるとしている。最後に edge feature に

(iii) Der See ist im Wald (*drin).
(Noonan 2017: 231)

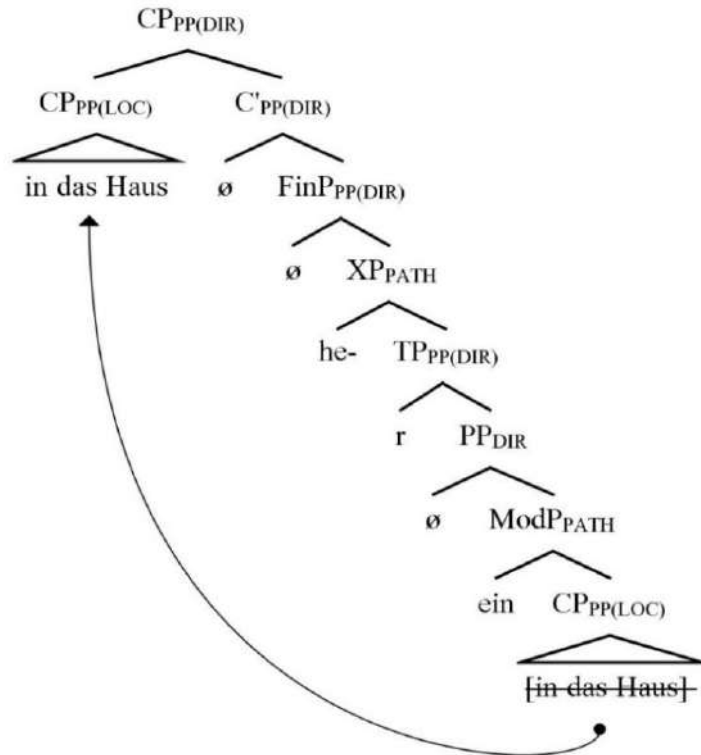
³ 口語に於ける shadow-P では *-r* という形でしか現れないが、書き言葉では直示的な *hin-/her-*が区別されるため、ダイクシスを表現する要素として想定される。

⁴ 音形を持たない Fin_{PP} はツリー上で省かれている。

よって PP_{LOC} が CP Spec に移動することによって full PP>shadow-P という語順が実現する。(8)は(書き言葉に於ける) *in das Haus herein* のツリーである。

(7) Sie klettert auf den Baum hinunter. (Noonan 2017: 234)

(8) *in das Haus herein* のツリー (Noonan 2017: 235)



尚、Noonan (2017)の議論の前提となっている Noonan (2010)では音形のない P_{LOC} 及び P_{DIR} が格の認可を担うため、方向を表わす前置詞が取る対格名詞句は P_{DIR} が認可するという分析となる。これは PP_{DIR} の主要部が事実上動詞的であり、そのために対格を認可とする主張に基づいている。

以上で見たように、派生の詳細は異なるが、場所及び方向を表わす前置詞ではいずれの場合も基底語順は shadow-P>full PP であり、full PP が CP 指定部へ移動することで full PP>shadow-P の語順が実現する。次節では PP の基底語順が shadow-P>full PP であるという Noonan (2017) の想定を受け入れることによって、文ムード毎の PP の語順の分析が可能となることを示し、これによって PP が独自に左方領域を有することを示す。

3. PP と文ムード

本節では分離 CP 仮説を PP 分析に適用するアプローチを採ることで平叙文及び命令文に於ける PP の語順を分析する。ドイツ語では文ムードによって前域に要素が現れるかが異なることが知られているが、これは当該の ForceP が edge feature を持つか否かによって説明されることを示す。次に平叙文、PP 単独命令

文及び動詞命令文に於ける PP の語順について観察した後、これらに統語的な説明を与える。

3. 1 主文の ForceP

Rizzi (1997)は文ムードを左方領域 (CP 領域) の左端にある ForceP が司ることを論じた。この主張を受け入れた場合、平叙文に於ける ForceP_{DECL} や命令文に於ける ForceP_{IMP} がそれぞれ想定されることになる。ドイツ語では例文(9)のように V2 文の前域にトピックでもフォーカスを受ける要素でもないフレーズが現れること (Fanselow & Lenertová 2010)、また V to C の移動が文ムードの意味によって惹き起こされているという主張が存在すること (Truckenbrodt 2006) を鑑みると、ドイツ語に於いては ForceP_{DECL} は指定部に要素を取る (edge feature を持つ) と考えられる。

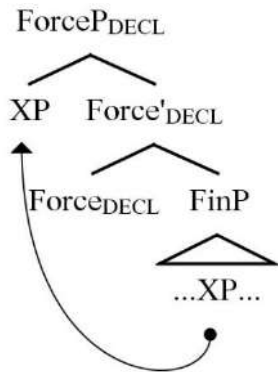
- (9) *Wahrscheinlich hat ein Kind einen HAsen gefangen.*
(Fanselow & Lenertová 2010: 173)

ドイツ語の動詞命令文では基本的に定形の動詞が文頭に現れ、それ以外の文頭に現れる要素は限られている (特に強勢を持つ要素は *contrastive focus* を受けた要素に限られている Wrátil 2005: 127)。よって、命令文の前域に要素を取るのは FocP などであり、ForceP_{IMP} は指定部を取らない (edge feature を持たない) と考えられる。

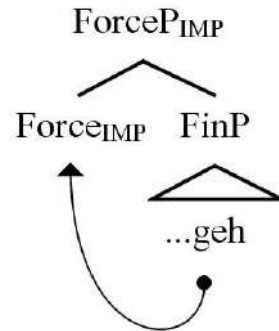
- (10)a. *Nun komm schon!*
 b. *Das VERGISS mal lieber!*
 c. *(Wem soll ich den Hut vererben?) Den Hut vererb DER ANKE!*
 (Wrátil 2005: 126)
- (11)a. *Über DIEse Dame rede lieber nicht!*
 b. *Den NAsenring kauf dir, nicht die Kette!*
 (Wrátil 2005: 128)

以上の議論から、文頭にトピックやフォーカスを受ける要素を取らない ForceP_{DECL} 及び ForceP_{IMP} の構造は以下の様に想定される。

(12) a. ForceP_{DECL} のツリー



b. ForceP_{IMP} (Geh...!) のツリー



3. 2 PP の語順

以下で示されているように、平叙文、PP 単独の命令文、及び PP を伴う定動詞命令文ではそれぞれ許容される PP (full PP 及び shadow-P) の語順が異なる。⁵

- (13) a. Sie ist aus dem Bett rausgegangen.
 b. ?Sie ist raus aus dem Bett gegangen.

- (14) a. ??Aus dem Bett raus!
 b. Raus aus dem Bett!

- (15) a. Geh aus dem Bett raus!
 b. Geh raus aus dem Bett!⁶

それぞれの構文に於ける PP の語順の容認度は以下の通りである。

表 1. 構文ごとの PP の語順の容認度

| | full PP>shadow-P | shadow-P>full PP |
|----------|------------------|------------------|
| 平叙文 | OK | ? |
| PP 単独命令文 | ?? | OK |
| 動詞命令文 | OK | OK |

⁵ 少数ではあるが、(13b)及び(14a)の様な語順を全く問題なく許容する話者がいたが、本稿ではこうした話者間の変異については踏み込まない。

⁶ シンポジウムの質疑応答にて(15b)の *aus dem Bett* は外置ではないかというご指摘を頂いた。ただ *raus* と *aus dem Bett* の間には通常 *Pause* は置かれなため、本稿では *aus dem Bett* は外置された要素ではないと考える。尚、平叙文に於いて *aus dem Bett* と *raus* それぞれを外置した文の容認度は以下のようになっている。

- (i) Sie ist rausgegangen aus dem Bett.
 (ii) *Sie ist aus dem Bett gegangen raus.

後の分析で見ると、平叙文に於ける *aus dem Bett* は PP の ForceP の指定部に移動するため、原理的に単独で (右方) 移動することが可能だが、*raus* は ForceP の内部に含まれるため、ForceP ごと移動しない限り動けない。よって、以上の文の容認性の差異が生じると考える。

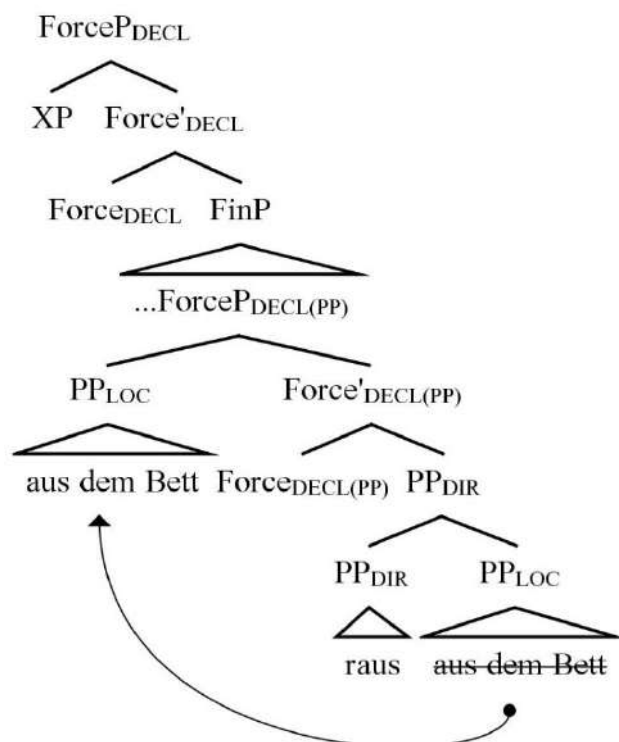
3.3 節では以上の事実は基底語順が shadow-P>full PP であること、及び PP が左方領域を単独で有することを前提に説明出来ることを論じる。

3. 3 ForceP と ForcePP

まず基底語順が shadow-P>full PP であり、PP が左方領域を有する (ForcePP が存在する) ことを前提として平叙文、PP 単独命令文及び動詞命令文の統語的分析を行い、その後比較としてこれらの前提を取らない場合の分析の問題点を示す。

平叙文の場合、full PP>shadow-P の語順のみが可能である(e.g. *Sie ist aus dem Bett rausgegangen*)。Noonan (2017)の分析を基本的に採用し、edge feature を有する ForceP_{DECL(PP)}の指定部に PP_{LOC} (*aus dem Bett*)が移動する⁷ために full PP>shadow-P の語順となると分析する。

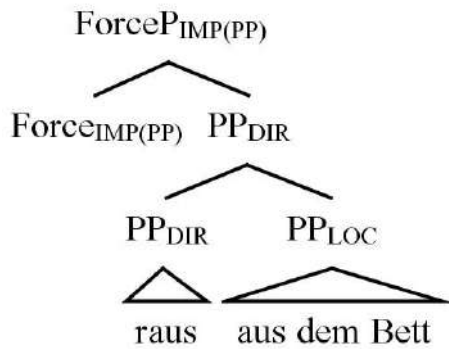
(16) 平叙文に於ける ForceP_{DECL(PP)} (cf. 13a)



PP 単独命令文の場合、shadow-P>full PP の語順のみが可能である(e.g. *Raus aus dem Bett!*)。ForceP_{IMP(PP)}は (動詞命令文と同じく) edge feature を持たず、指定部に要素を取らないため、PP_{LOC} (*aus dem Bett*)は元位置に留まり、結果として基底語順と同じ shadow-P>full PP という語順で現れる。

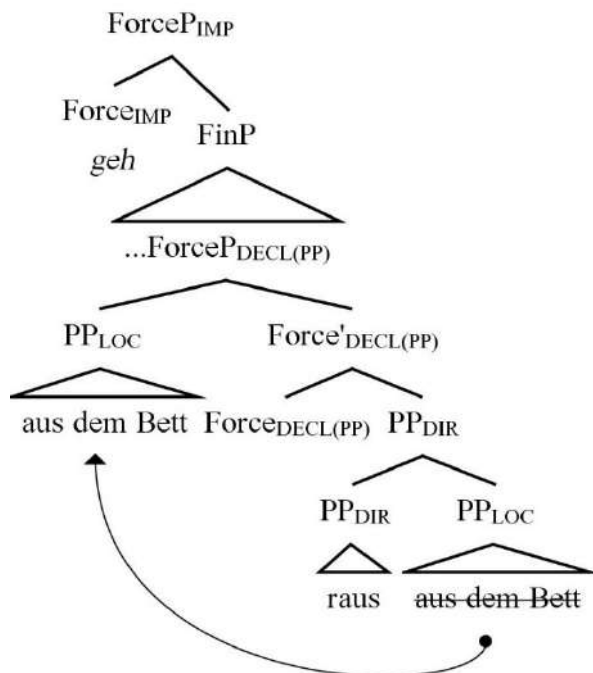
⁷ shadow-P が ForceP の指定部に移動しない理由として、shadow-P が T といった動詞的要素を持つために V to C 移動が起こることが考えられる。ただ検証には詳細な議論を要するため、これは今後の課題とする。

(17) PP 単独命令文に於ける Force_{IMP(PP)} (cf. 14a)

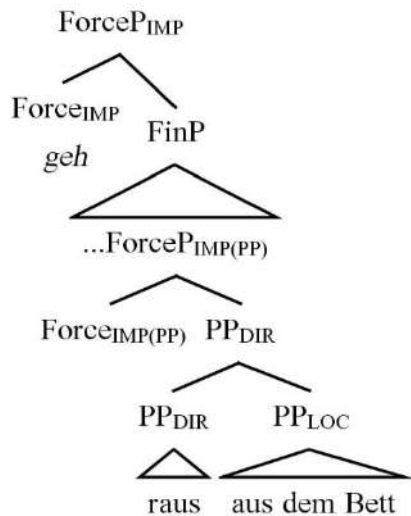


動詞命令文の場合、full PP>shadow-P、及び shadow-P>full PP 双方の語順が可能である (e.g. *Geh aus dem Bett raus!* 及び *Geh raus aus dem Bett!*)。文全体の命令の文ムードは主文の Force_{IMP} が担うため、PP はデフォルトのムードである Force_{DECL(PP)} としても命令の文ムードを有する Force_{IMP(PP)} としても実現が可能である。

(18) 動詞命令文に於ける Force_{DECL(PP)} (cf. 15a)



(19) 動詞命令文に於ける ForceP_{IMP(PP)} (cf. 15b)



尚、ForceP_{DECL} がデフォルトの文モードであり、他の文モードの作用域に入ることが出来ることは以下の類似の事例から裏付けられる。

- (20)a. Sag bloß, du hast es vergessen!
b. Hat Peter gesagt, dass er den Kuchen gegessen hat? (伊藤 2019: 68)
c. Hat Peter geglaubt, Maria wird wieder mit dem Rauchen anfangen?/ dass Maria wieder mit dem Rauchen anfangen wird? (Antomo & Steinbach 2010: 8)

しかし (21)で示されるように、ドイツ語では従属文に命令形の動詞が現れないことが指摘されており (Rosengren 1992, Wratil 2000)、命令の文モードを有する ForceP_{IMP(PP)}が主文の下に位置する(19)の分析は一見問題をはらんでいるように見える⁸。だが Rögvaldsson (2003)、Wratil (2005)及び Kaufmann (2012)で述べられているように、ハンガリー語や古アイスランド語、日本語などでは従属節に命令形の動詞が現れることに何等問題はない。よって原理的に (つまり通言語的制約によって) 従属節に於ける命令形動詞の出現が制限されている訳ではなく、以上の制約はドイツ語の動詞命令形の個別的な性質によるものであると考えられる。

- (21)a. *Petra bittet dich, dass hol sie vom Bahnhof ab.
b. * Petra bittet dich, dass sie vom Bahnhof abhol.
c. * Petra bittet dich, hol sie vom Bahnhof ab.
(Wratil 2013: 133)

- (22) 花子は太郎に二郎を探せと命じた。 (日本語)

⁸ シンポジウムの質疑応答にてご指摘を頂いた。

- (23) ...en það vil eg við þig mæla, ...,
 aber das woll-1SG ich mit dir sprechen
 að þú ver með mér þar
 dass du sei(IMP) mit mir dort
 „...しかし私はあなたに言いたい、...私と共に留まれと...“
 (古アイスランド語: Eyrbyggja saga, p. 557)
 (グロスは Wratil 2013: 135 に基づく。日本語訳は筆者による)

このことから、少なくとも ForceP_{IMP(PP)}が主文の ForceP の下に出現しないことを予測する根拠は希薄であると結論付けられる。

以上の議論によって、PP の基底語順が shadow-P>full PP であること、及び PP が左方領域を取るを構成していることを前提にすればそれぞれの構文に於ける PP の語順を正しく導き出せることを示された。以下では基底語順を full PP>shadow-P とした場合や PP が左方領域を取らないとした場合に、正しく PP の語順が導けないことを示す。

基底語順を full PP>shadow-P とした場合、命令文で shadow-P が文頭に移動する動機が不明である。これは PP に左方領域を想定する場合も想定しない場合も問題となる。PP が左方領域を有し、shadow-P を V 相当の機能を有する要素として V to C 移動が起きると考えた場合であっても、基底で shadow-P (V)の左に位置すると考える full PP がどの語彙範疇に当たる要素なのかを説明しなければならないという問題は依然として残る。

PP が左方領域を有しないとした場合、平叙文と PP 単独命令文とで容認される PP の語順が異なること、及び動詞命令文に於いて PP の両方の語順が容認される理由を説明出来ない。仮に PP 単独の命令文の文モードが (省略された) 主文由来だと考えたとしても、動詞命令文との差異を説明することが出来ない。

以上の議論から、各構文に於ける可能な PP の語順は、基底が shadow-P>full PP であり、PP が左方領域を有することによって初めて説明出来ることが示された。

3. 4 疑問文に於ける PP

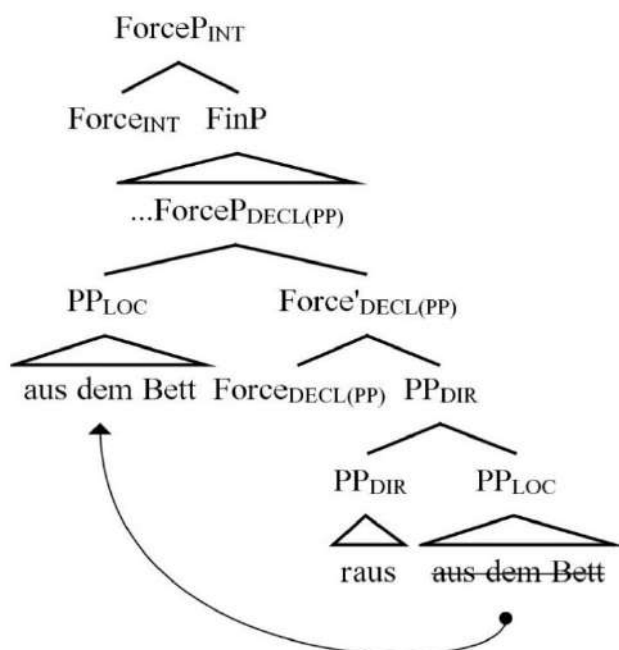
最後に比較として疑問文に於ける PP の語順を見る。疑問文⁹の場合、以下の様に PP は full PP>shadow-P という語順でのみ現れる。

- (24)a. *Ist sie schon raus aus dem Bett gegangen?
 b. Ist sie schon aus dem Bett rausgegangen?

⁹ 疑問文が依頼のニュアンスを持つ場合に shadow-P>full PP という語順の容認度が full PP>shadow-P の語順と同程度になる例もあったが、この原理については今後の課題とする。

主文が疑問の文モードを持つ(24)の場合、デフォルトである平叙文の文モードを有する ForceP_{DECL(PP)}が認可され、命令の文モードを持つ ForceP_{IMP(PP)}は疑問文の文モード作用域下では認可されないとする予測が 3.3 節の議論に基づけば立てられることになるが、(24)では実際にこれに適う結果となっている。以下は(24a)の派生を示すツリーである。

(25) 疑問文に於ける ForceP_{DECL(PP)} (cf. 24b)



4. 結論

本稿では Rizzi (1997)の分離 CP 仮説を PP の分析に適用し、PP が ForceP を有すると想定することによって、異なる文モードに於ける full PP と shadow-P の語順を説明した。Noonan (2017)は主に平叙文に於ける PP の形態的及び形式的振る舞いに注目して分離 CP 仮説の PP 分析への適用を行ったが、本稿は談話機能に着目することで表面的には説明が難しいように思われる PP の語順の振る舞いを明らかにしたという点で、よりカートグラフィー分析の原点に立ち返るような議論が出来たのではないかと考える。ただ無論理論的課題は多く残されており、例えば V の右側に PP の基底生成位置を据える想定の妥当性や、主文では ForceP の下にあると考えられる他の機能範疇が PP にも存在しているかなどについてはより踏み込んだ議論が必要である。いずれにせよ、本稿が今後のカートグラフィー分析によるドイツ語研究の射程を拡げる契機となれば幸いである。

謝辞

本稿の内容は日本独文学会 2019 年春季研究発表会でのシンポジウム「統語と

意味のインターフェイスをめぐって「カートグラフィーの射程」に於ける口頭発表に基づいている。様々な示唆に富むコメントを下された参加者の方々にこの場を借りてお礼を申し上げる。

参考文献

- Antomo, M. & Steinbach M. (2010). Desintegration und Interpretation: Weil-V2-Sätze an der Schnittstelle zwischen Syntax, Semantik und Pragmatik. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 29, 1-37
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In Kenstowicz, M. (Ed.): *Ken Hale: a life in language*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1-52
- Dikken, M. den (2003). On the Syntax of Locative and Directional Adpositional Phrases. Manuscript, CUNY, https://www.gc.cuny.edu/CUNY_GC/media/CUNY-Graduate-Center/PDF/Programs/Linguistics/Dikken/syntax_of_pp.pdf
- Dikken, M. den (2010). On the Functional Structure of Locative. In Cinque, G. and Rizzi, L. (Eds.): *Mapping Spatial PPs: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, Oxford: Oxford University Press, 74-126
- Fanselow, G. & Lenertová, D. (2010). Left peripheral focus: mismatches between syntax and information structure. *Natural Language & Linguistic Theory* 29, 169–209
- Hiraiwa, K. (2005). Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture. dissertation, MIT
- Kaufmann, M. (2012). *Interpreting Imperatives*. Dordrecht: Springer
- Koopman, H. (2005). On the parallelism of DPs and clauses: Evidence from Kisongo Maasai. In Carnie, A., Harley, H., and Dooley, S. A. (Eds.): *Verb First: On the syntax of verb-initial languages*, Amsterdam: John Benjamins
- Koopman, H. (2010). Prepositions, Postpositions, Circumpositions, and Particles. In Cinque, G. and Rizzi, L. (Eds.): *Mapping Spatial PPs. The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, Oxford: Oxford University Press, 26-73
- Noonan, M. (2010). À to Zu. Cinque, G. und Rizzi, L. (Eds.): *Mapping Spatial PPs: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, Oxford: Oxford University Press, 161-195
- Noonan, M. (2017). Dutch and German R-pronoun: R you sure it's P-stranding? In Newell, H., Noonan, M., Piggot, G., and Travis, L. D. (Eds.): *The structure of words at the interface*, Oxford: Oxford University Press, 209-239
- Rizzi, L. (1997). The Fine Structure of the Left Periphery. In Haegeman, L. (Ed.): *Elements of Grammar*, Dordrecht: Kluwer, 281-337
- Rögnvaldsson, E. (2003). The Syntax of the Imperative in Old Scandinavian. Manuscript, University of Iceland.

- Rosengren, I. (1992). Zur Grammatik und Pragmatik des Imperativsatzes. *Sprache und Pragmatik* 28, 1–57
- Svenonius, Peter (2004). On the Edge. In Adger, D., de Cat, C., and Tsoulas G., (Eds.): *Peripheries: Syntactic Edges and their Effects*, Dordrecht: Kluwer, 261–287
- Terzi, A. (2010). Locative Prepositions and Place. In Cinque, G. and Rizzi, L., (Eds.): *Mapping Spatial PPs. The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, Oxford: Oxford University Press, 196–224
- Truckenbrodt, H. (2006). On the semantic motivation of syntactic verb movement to C in German. *Theoretical Linguistics* 32 (3), 257–306
- Wrtil, M. (2000). Die Syntax des Imperativs. *Linguistische Berichte* 181, 71–118.
- Wrtil, M. (2005). *Die Syntax des Imperativs: Eine strukturelle Analyse zum Westgermanischen und Romanischen*. Berlin: Akademie Verlag
- Wrtil, M. (2013). Imperativsatz. In Meibauer, J., Steinbach, M., and Altmann, H. (Eds.) *Satztypen des Deutschen*, Berlin/ Boston: de Gruyter
- 伊藤克将 (2019). 『談話指向統語論によるドイツ語左方領域の研究』 博士論文、東京大学

半法助動詞としての *drohen* の意味解釈

岡野 伸哉

1. はじめに

zu 不定詞とともに用い、「～する恐れがある」のような懸念を含んだ予測を表す *drohen* は、主としてその統語的振る舞いに基づき、しばしば半法助動詞 (Halbmodale) の 1 つとして分類される (IDS-Grammatik 1997, Eisenberg 1999, Duden 2016)。一方で、この用法をどのような意味のクラスに分類すべきかということについては研究者の間でも意見が一致していない。認識的モダリティを表すとする見解 (Gunkel 2000, Kiss 2005)、主として時間・アスペクト的な意味を表すという主張 (Reis 2005, Heine & Miyashita 2008)、証拠性表現であるという立場 (Diewald & Smirnova 2010) など様々である。本稿では、*drohen* を純粹に時間・アスペクト的な表現としたときに予想される含意のパターンを検証し、*drohen* に時間的・証拠的意味の双方を与える分析が望ましいことを論じる。また、*drohen* の主たる意味的振る舞いを捉えるための形式的な分析を、Yalcin (2010) の確率的アプローチを用いて提案する。このような分析の帰結として、統語構造と意味解釈の対応関係は必ずしも一対一対応ではなく、可能なカートグラフィー分析の幅に制約が与えられることを論じる。

1.1 半法助動詞としての *drohen*

本稿で半法助動詞と呼ぶ *drohen* は、統語的には *zu* 不定詞を伴い、意味的には望ましくない事態の生じる予兆等を表現する用法である。これに対し、脅迫行為を指示し、したがって主語に脅迫の主体としての選択制限を課す用法を語彙的な *drohen* と呼ぶことにする。以下の例文では (1a) が前者で、(1b) が後者である。

- (1) a. Das Wetter droht schlechter zu werden. [Reis (2005: 126) *drohen*2]
b. Paul droht dem Nachbarn, den Baum zu fällen. [Reis (2005: 126) *drohen*1]

半法助動詞としての *drohen* について、Reis (2005) によるより詳細な特徴づけを引用する：

- (2) Reis (2005: 127) による半法助動詞としての *drohen* の特徴づけ
[筆者により一部表記等修正]
*drohen*2 (+Infinitiv)

- hat kein Adressatenargument (d.h. ist ein 2-stelliges Prädikat)
- hat ein propositionales Argument (realisiert durch den Infinitiv)
- bezeichnet keinen (Sprech-)Akt von x (d.h. vergeben keine θ -Rolle Agens)
- bezeichnet Existenz klarer Indizien/eines klaren Eindrucks, dass p demnächst eintritt
- drückt negative Bewertung von p aus

本稿ではこの特徴づけを基にして半法助動詞 *drohen* を語彙的 *drohen* から区別し、前者のみを分析の対象とする。

1. 2 意味分析が捉えるべき半法助動詞 *drohen* の諸性質

半法助動詞 *drohen* の意味を分析するにあたって、捉えなければならない性質が少なくとも 5 つ挙げられる：内包性、未来性、at-issue 性、話者のコミットメント、被害性である。

1. 2. 1 内包性 (Intensionalität)

半法助動詞 *drohen* は、表現の内包(Intension)を参照する表現である。つまり、その表現が現実世界、現時点において指示対象をもっているとは限らない。例えば以下の(3)においては、*aus dem Streik ein Generalstreik zu werden*¹「ストライキからゼネストに発展する」という命題が *drohte* によって参照され、全体としてそのような懸念があることが表現されていると考えられるが、第二の文からは、実際にそのような事態には発展しなかったことが見て取れる。

(3)² Aus dem Streik **drohte ein Generalstreik** zu werden. [...] Der Streik wurde abgeblasen.

1. 2. 2 未来性 (Futurität)

半法助動詞 *drohen* の埋め込む命題 (prejacent、脚注 1 を参照) は、基準時 (主文での現在形の場合文全体の評価時) から見て未来のことでなければならない。例えば以下の(4)では、Nicole が現在どこに住んでいるかということの問題にしており、この場合 *drohen* を使うことはできない。

¹ 本論では、半法助動詞 *drohen* はその主語と *zu* 不定詞句からなる命題を意味的なスコープに収める、という立場にとる。ここで主語 *ein Generalstreik* と *zu* 不定詞句の残りの部分をまとめているのはそのような立場に基づく。このような命題を、von Fintel & Heim (2011) に倣い prejacent と呼ぶこととする。

² DeReKo, U14/NOV.00573 Süddeutsche Zeitung, 06.11.2014, S. 19; Dehnbare Formeln 太字及び下線は筆者により、以下も同様である。

(4) [Ich hatte erwartet, dass Nicole noch in Amsterdam wohnt.]

Aber nun ^{ok}scheint/*droht sie auf einmal in Berlin zu wohnen. [Colomo (2011: 239)]

1. 2. 3 At-issue 性 (他のオペレータ下への意味的埋め込み可能性)

半法助動詞 *drohen* の予兆的意味は、他の意味的なオペレータと相互作用を起こす。とりわけ、以下に見るように条件文の前件や否定といったオペレータへの意味的埋め込みが可能である。すなわち、(5)ではスポーツウェアを着るべき条件として、雨の降る予兆が挙げられており、単に雨が降ることが条件なのではない。また、(6)では試合のひっくり返る予兆の存在自体が否定されている。

(5) 条件文前件への意味的埋め込み

Sportliche Kleidung sollte getragen werden, **wenn** es zu regnen **droht**, auch eine Regenjacke.³

(6) 否定のスコープ下への埋め込み

[Wir waren dieses Mal einfach besser.] Die Partie **drohte nie** zu kippen.⁴

このような振る舞いは、基本的に条件文前件や否定のスコープ下に収まらない前提(Präsupposition)や慣習的含意(konventionelle Implikatur, CI)のそれとは異なっている。このような *drohen* の性質を、Potts (2005)の分類に従って at-issue 性と呼ぶ。

1. 2. 4 話者のコミットメント

半法助動詞 *drohen* の *prejacent* を否定した命題に対して、話者はコミットすることができない。⁵例えば以下の不適切とされる(7)は、「ダムが洪水で決壊する」を *prejacent* にもつ *drohen* 文に、「ダムが持ちこたえる」を表す文が後続している。この2文目が *drohen* 文の *prejacent* を否定した命題「ダムが洪水で決壊しない」を含意しており、2文目を発話することで、話者がそのような命題にコミットしていると思なすことができる。このコミットメントによって、*drohen* 文の

³ DeReKo, M05/JUN.46624 Mannheimer Morgen, 08.06.2005; Sport mit Spaß in Weinheims Innenstadt

⁴ DeReKo, K15/JAN.01305 Kleine Zeitung, 05.01.2015, S. 38; Den Sieg nie infrage gestellt

⁵ *drohen* の使用により単純にその *prejacent* に対するコミットメントが含意されるわけではないことを、以下のような *möglicherweise* が共起する例は示している：

(i) Die Bodenseebucht bei Unteruhldingen, in der das bekannte Pfahlbaumuseum liegt, droht *möglicherweise* zu verlanden. (DeReKo, A97/OKT.30023 St. Galler Tagblatt, 17.10.1997, Ressort: TB-THG (Abk.); Gefahr für das Pfahlbaumuseum)

使用が不適切になると考えられるのである。

(7) #Der Damm droht unter den Fluten zu brechen, aber er hält stand.

[Colomo (2011: 241)]

1. 2. 5 被害性 (Malfaktivität)

半法助動詞 *drohen* の *prejacent* は、評価者にとって望ましくない事態を表す。この評価者がどのように決定されるかということや、被害性がどのようなレベルの意味であるのかということ⁶については本論で扱える範囲を超えるため、以下の分析では被害性については扱わないこととする。

1. 3 主張

本稿の主張は以下の通りである：

(8) 半法助動詞 *drohen* は時間的かつ証拠的な表現である

この主張を以下のように形式化することを4節で提案する：

(9) 形式化（詳細は4.2節を参照）： $drohen(\varphi) \sim \Delta^i_a FUT \varphi$

パラフレーズ：「ある顕著な個人 *a*（通常は話者）が、 φ が将来成立する
ということの証拠 *i* を有している」

以下に本論の構成を示す。2節では Reis (2005, 2007)による半法助動詞 *drohen* の時間・アスペクト的分析を取り上げ、その予測にとって問題となりうる観察を2点指摘する。3節では、本論の主張するような時間性と証拠性を参照する *drohen* の意味分析が、統語論におけるカートグラフィのアプローチにとってどのような含意をもつかを論じる。4節では Yalcin (2008)の確率的論理を用いた形式化を提案する。5節はまとめである。

⁶ 被害性の意味は単純に *at-issue* 的なものとは言い難い。以下に見られるように、態度動詞に埋め込まれた場合、事態を望ましくないと思う主体は、話者でもありうるし(ia)、態度動詞の主語でもありうる(ib)。*drohen* のこのような被害性の意味の投射性については稿を改めて論じたい。

(i) a. Der Saboteur freut sich, dass der Felsbrocken auf die Gleise zu stürzen droht.

b. Der Konkurrent ärgert sich, als das Fest ein Erfolg zu werden droht. [Colomo (2011: 245)]

2. *drohen* の意味論

Reis (2005, 2007)は半法助動詞 *drohen* を時間・アスペクト的な表現であるとし、以下のように、prejacent の表す事象の初期状態(Anfangszustand)あるいは prejacent に先行する段階(vorausgehende Phase)を参照する分析を提案している⁷：

(10) “*drohen2/versprechen2* bezeichnet einen Sachverhalt p , der durch Indikatoren $f_1 \dots f_n$ für das Eintreten von p definiert ist.

=> $f_1 \dots f_n$ sind entweder eindeutige Indikatoren des Anfangszustands von p oder einer [bzw. der?] p vorausgehenden Phase, so dass bei normalem Ablauf der Dinge p eintritt.

=> p ist kein Zustand, sondern ein Ereignis i.e.S.

[Reis (2005: 132)、筆者により一部表記修正]

以下では、このような時間・アスペクト的な分析にとって問題となる観察を挙げ、評価者の視点を含む証拠性という観点を導入することが *drohen* の意味分析にとって望ましいことを論じる。

2. 1 話者のコミットメント

1.2.4 節で見たように、*drohen* を現在形で使用した場合、話者はその prejacent を否定した命題にコミットすることができない：

(11) = (7) #Der Damm droht unter den Fluten zu brechen, aber er hält stand.

[Colomo (2011: 241)]

この観察は、(10)のような分析からは予測することが難しい。そこでは prejacent が完全に成立するのは、物事が通常の経過を辿った場合であるとされており、そうでない場合については prejacent の成立が保証されないからである。例えば (7)は「通常ならばダムは決壊するところを、なにか異常なことが起きていて、ダムが持ちこたえる」という信念をもっている話者によって主張することが可能である、という予測がなされる。これに対して、本論で主張するように *drohen* の意味論に証拠の評価者（典型的には話者）の視点という観点を導入することで、その評価者のコミットメントに関する制約に言及することが自然に可能となる（詳しくは4節を参照）。

⁷ 以下で p は *drohen* の prejacent を表している。

2. 2 Reis 分析の帰結としての進行形との類似点および含意のパターン

Reis が *drohen* に対して与えた意味は、*prejacent* に対応する事象の初期あるいは事前段階を参照し、事象の完全な達成(*culmination*)を含意しないという点で、進行形に近いところがある。この Reis の分析の予測をテストするために、Portner (2011)が *Actuality Principle* と呼ぶ以下の推論のパターンが良いテストとなる。⁸

(12) *Actuality Principle: Past ϕ* は *Past (Progressive (ϕ))* を含意する

進行形がこの推論のパターンに従うことは、以下の(13)のような例で確かめることができる。すなわち、人間が大西洋を(泳いで)横断するということは、通常ではありえそうもないことであり、単に Mary が大西洋で泳いでいるのを見た段階では”Mary is crossing the Atlantic.”という文を発話するのは不適切である。ところが、実際に Mary が大西洋を泳いで横断したという事実があった場合、つまり”Mary crossed the Atlantic.”が正しい状況では、”Mary was crossing the Atlantic.”もまた正しいといえる。⁹

(13) Mary was crossing the Atlantic. [Landman (1992: 14)]

これと同様に、Reis の純粹に時間・アスペクト的な *drohen* の分析は、*Past ϕ* が *Past (drohen ϕ)* を含意することを予測する¹⁰。この含意が正しいかどうかを、以下の2つのテストケースで確認した：

(14)

a. 文脈：Marie は古代ゲルマンの英傑である。彼女はある戦争で、神懸かり

⁸ 進行形に対してはモダリティ的(内包的)分析を採用することが広く行われている(Dowty (1977; 1979), Landman (1992), Portner (1998)が代表的)が、それが唯一の選択肢ではない。精緻化されたイベント構造に基づいた非モダリティ的分析も数多くある(それらの概説についてはPortner (2011)を参照)。したがって、証拠性表現について典型的な内包的分析を *drohen* に対して行うことが、進行形との類似点を指摘することによって直ちに支持されるわけではない。

⁹ Landman 自身による説明は以下のとおりである：“Mary gets into the water in France. [...] she doesn’t sink but, through divine intervention, actually manages to make it across the ocean. [...] Now if you ask me [...] “what was she doing there?” I could answer truthfully, “Well, I would never have believed it at the time, but in fact she was crossing the Atlantic Ocean.” So on this scenario, [(13)] is true” (Landman 1992: 14-15).

¹⁰ Reis (2005, 2007)による意味記述は、形式化がなされていないため、何を予測するのかということに関しては曖昧な点が残る。しかしながら、(10)に見るように、物事の通常の経過や事象の諸段階を参照しているという点で、進行形に対して典型的になされる分析との平行性を認めるには十分であると考えられる。

的な力によりローマ軍を根絶やしにした。その戦争が始まった当初は、彼女がそのような力を持っているとは誰も知らなかった。戦争が始まるや否や、Marie はローマ兵を討ちに行き、幾ばくかの時間を要したが、全軍を根絶やしにした。 Marie ist eine germanische Heldin im Altertum. Sie hat in einem Krieg mit ihrer göttlichen Kraft die römische Armee ausgerottet. Als der Krieg begann, wusste damals niemand, dass sie so eine Kraft hat. Sobald der Krieg ausgebrochen war, hat Marie begonnen, römische Soldaten zu schlagen, aber sie hat eine gewisse Zeit benötigt, bis sie endlich die ganze Armee ausgerottet hat.

b. 質問: 文脈で述べられている文が全て正しいとき、その情報のみに基づいて以下の文(14c)が正しいことを結論できるか?

c. Als der Krieg ausbrach, drohte die römische Armee von Marie ausgerottet zu werden.

(15)

a. 文脈: Johann の犬が昨夜突然死んだ。Johann も含めて誰もそのことを予期していなかった。 Johanns Hund ist gestern Abend plötzlich gestorben. Niemand, einschließlich Johann, hatte das geahnt.

b. 質問: 文脈で述べられている文が全て正しいとき、その情報のみに基づいて以下の文(15c)が正しいことを結論できるか?

c. Johanns Hund drohte irgendwann an/vor dem Abend zu sterben.

上記のテストケースでは、いずれも「誰の視点で話をしているか分からないので、含意が成立するかは分からない」という母語話者の反応が得られた。このことは、時間・アスペクト的分析からは直ちには予測できない。なぜならば、*prejacent* に対応するイベントの初期/準備段階の成立は客観的な世界に関する事実であり、判断する視点の位置に関わらず成否が判断可能だからである。一方で、*drohen* の証拠的分析ではこの反応が説明可能である。過去の時点では(文脈中の)誰も予兆を得ていなかった、ということが文脈により与えられていることから、視点を過去時点での文脈中の登場人物の誰かにおけば文は偽となる一方で、*prejacent* の事態が実際に成立したということも情報として与えられているため、現在の時点での、この質問の回答者の視点からは文は真となるという予測を行う。どの視点をとるかにより文の真偽が変わるため、はっきりとした回答が得られなかったことに対する説明が可能である。

上記のような観察から、*drohen* の意味分析に関しては、純粋に時間・アスペクト的なものよりも、証拠を有する個人の視点を参照するものの方が望ましい

ということが結論付けられる。

3. *drohen* の統語論への含意

本節では、時間性と証拠性（視点性）の両方を参照するような *drohen* の意味分析が、統語分析にとってどのような含意をもちうるかということ論じる。3.1 では、*drohen* とまとめて扱われることの多い半法助動詞 *versprechen* を、アスペクト句(AspP)の主要部に位置づける Jędrzejowski (2017)の主張を紹介し、その根拠は *drohen* に関しても成り立つことを確認する。3.2 では機能的な主要部への階層的アプローチを概観し、機能範疇に一般的な意味をコードさせることと、*drohen* を AspP 主要部に位置づけるような分析の両立が難しいことを論じる。

3.1 Jędrzejowski (2017)の半法助動詞 *versprechen* に関する主張

Jędrzejowski (2017)は、半法助動詞 *versprechen* は VP の上に位置するアスペクト句(AspP)の主要部を占めると主張する。その根拠となる観察は Reis (2005, 2007)によるもので、以下の3つである：(i) 時制オペレータのスコープ下に入ることができる（認識的・証拠的法助動詞との相違点）；(ii) 疑問オペレータのスコープ下に入ることができる（認識的法助動詞との相違点）；(iii) 繰り上げ動詞 (Anhebungsverb)であるにも関わらず、項の一部を後域に置くことを許す（アスペクト的動詞 *anfangen*, *aufhören*, *beginnen* との類似点）¹¹。

同様の観察は半法助動詞 *drohen* についても成り立つ。まず、(i)時制オペレータのスコープ下への出現の証拠として、*drohen* は過去解釈を伴って過去形で出現することができる：

(16) Nach dem Elfmeter drohte das Spiel zu kippen.

[vgl. (*) Nach dem Elfmeter mußte_{epist} das Spiel kippen]. [Reis (2005: 129)]

(ii) 疑問オペレータのスコープ下への出現も、以下の例により確認される：

(17) Wo noch droht es heute zu regnen?

[*Wo noch muß_{epist} es heute regnen?] [Reis (2005: 130)]

最後に、(iii)繰り上げ動詞でありながら後域への項の出現を許すという性質も

¹¹ Reis は「全ての繰り上げ動詞は義務的に Kohärenz を示す」という立場(Haider 1993: 268)から、*drohen*, *versprechen* やこれらのアスペクト的動詞も義務的に kohärent な繰り上げ動詞であるとし、項の一部が Nachfeld に出現するケースはいわゆる第三構文(die dritte Konstruktion)であるとしている。

drohen はアスペクト的動詞と共有する：

(18) Da ihm also drohte das Geld auszugehen [Reis (2005: 141)]

(19) Als der Ballon anfang/begann/aufhörte dramatisch zu sinken. [Reis (2007: 19)]

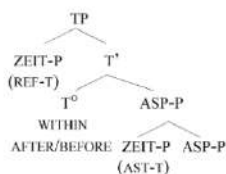
これらの観察から、Jędrejowski (2017)の *versprechen* に関する主張は、そのまま *drohen* についても成り立つと考えられる。次節では、このように *drohen* を AspP 主要部(Asp⁰)に位置づける主張と、機能的な主要部への階層的アプローチの両立が難しいことを論じる。

3. 2 機能的な主要部への階層的アプローチと Asp⁰ 分析

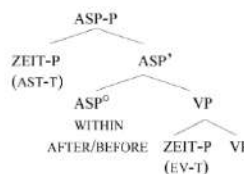
本論では *drohen* を時間的・証拠的表現であると主張するが、時間性と証拠性に関しては、それぞれを統語的な階層構造の中で捉えようとする立場が存在する。例えば Stowell (1996)では動詞句の表す事象の成り立つ時間を ZEIT-PHRASE という機能範疇によって捉え、時制はその時間と参照時との関係を表現するものと分析される。Demirdache & Uribe-Etxebarria (2007)ではさらに進んで、時制・アスペクト・時間副詞について、いずれも複数の ZEIT-P の表す時間を項にとってそれらの間の関係を表すものという分析を提案している。下図 1 では REF-T は参照時（主文では発話時）を、AST-T はアスペクトのための視点を置く時間¹²を、EV-T は動詞句の事象の成り立つ時間を表している：

図 1 : Demirdache & Uribe-Etxebarria (2007: 338)

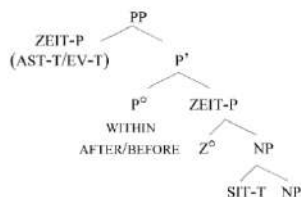
(14) a. *Syntax of tense*



b. *Syntax of aspect*



c. *Syntax of time adverbs*



¹² Demirdache & Uribe-Etxebarria (2007)ではこれを *assertion time* と呼んでいる。

証拠性に関しても、Speas (2010)が同様の関係的な分析を提案している。ただし、この場合の関係は時間ではなく以下に挙げる状況の間に成り立つ関係である：

- (20) 評価状況 (ES) *prejacent* が真になる状況
 参照状況 (RS) ES と DS に関連する状況
 談話状況 (DS) 文の発話される状況 [Speas (2010: 137)より]

これらの状況間の関係を、証拠性を表す形態素はその分類に応じて以下の(21)のようにコード化するとされる。例えば個人的経験を証拠とする形態素は、「RS が ES を含む」と「RS が DS を含む」の両方が成り立っていることを示している：

(21)

| | |
|----------------|----------------|
| 個人的経験 | 直接証拠 |
| RS が ES を含む | RS が ES を含む |
| RS が DS を含む | RS が DS から到達可能 |
| 間接証拠 | 伝聞 |
| RS が ES から到達可能 | RS が ES から到達可能 |
| RS が DS を含む | RS が DS から到達可能 |

[ebd.: 141 より形式を変更・和訳して引用]

上記のようなアプローチでは、時制や証拠性形態素には固有の関係的意味が与えられている。証拠性と時制は別個の階層をなし、同じ一つの部分木の中で両者それぞれの関係を表現することは困難なように思われる。本論の主張するように半法助動詞 *drohen* が証拠的要素と時間的要素の混合した意味を寄与とした場合、そのようなアプローチにおいて、*drohen* を階層上のどこに位置づければ良いかは（意味を根拠とする限り）明らかではない。つまり、*drohen* の意味分析に基づくと、それを（Jędrzejowski (2017)の *versprechen* に関する分析のように）特定の機能範疇に位置づけることと、機能範疇に一般的な意味をもたせることの両立が難しくなり、可能な統語分析に対する制約が与えられることになる。

4. 半法助動詞 *drohen* の形式意味論に向けて

本論における *drohen* の分析とそのパラフレーズを再掲する：

(22) $drohen(\varphi) \sim \Delta^i_a FUT\varphi$

パラフレーズ: 「ある顕著な個人 a (通常は話者) が、 φ が将来成立するということの証拠 i を有している」

この分析の前提とする枠組みを 4.1 で概説し、4.2 で実際に提示する。

4.1 概説

これまで述べてきた、評価者の視点を伴う証拠性という考え方は、McCready & Ogata (2007)による以下の定式化によって捉えることができる:

(23)

$\Delta^i\varphi$ [証拠的表現+prejacent を形式言語に翻訳した式]が世界 w , 時間 s , 確率関数 μ のもとで真となるのは以下の場合、そしてその場合のみである:

- a. s 以前のある時間(証拠 i が導入される以前)において、 φ はより確率が低かった;
- b. φ は証拠 i が与えられてもなお完全に確かではない¹³;
- c. 証拠 i に基づく φ の確率は、話者が証拠 i を意識¹⁴した時点と s の間で一度も低下しなかった(つまり、証拠 i の下での確率 φ は単調増加的である)

[McCready & Ogata (2007: 185)より]

本論では上記の証拠性に関するアイデアを、Yalcin (2010)の確率的なフレームワークで表現する。概略的に、*drohen*(φ)は以下の場合、そしてその場合のみ真となる:*FUT*(φ) (「 φ が未来に成り立つ」) の確率が評価者 a ・評価時 s において低すぎず、かつ、評価時以前のある時点 r において *FUT*(φ)の確率は s より低く、 r と s の間でその確率が減少することはなかった(つまり、 r 以降に評価者が証拠を獲得することによって、 s に至るまで *FUT*(φ)の確率が単調に上昇した)。

以下では、この分析が 1.2 節でみた半法助動詞 *drohen* の性質を正しく捉えていることを確認する。まず内包性(3)についてであるが、(22)は prejacent が未来に成り立つような世界を尤もらしいと述べているだけで、prejacent が評価世界で成り立っている(ことが尤もらしい)という含意が出ないことから、正しく予測される。同様に未来性(4)についても、未来性オペレータ *FUT* の存在により直ちに予測される。さらに、*drohen* が他の真理条件的(at-issue 的)オペレータに埋め込まれうること(5), (6)についても、証拠性オペレータ Δ が at-issue のレベルで

¹³ しかし、1/2 より高いとされる (McCready & Ogata 2007: 192)。

¹⁴ McCready & Ogata (2007)の実際の定式化では、「話者が証拠に対して意識した時点」というものは明示的に導入されない。確率の単調増加性をもって、証拠の獲得を表現している。本稿の分析もこの方針に従う。

定義されているため、捉えることができる（具体的には 4.2 節参照）。最後に、評価者が *prejacent* の否定にコミットしない(7)という観察は、「*FUT*(φ)の確率が評価時において低すぎない」という制約（および、 $\Pr(\psi) = 1 - \Pr(\neg\psi)$ という前提）から得られる。¹⁵

4. 2 形式体系

- 形式言語 $\mathcal{L}_{A,\Delta}$

-- *Var* は変数の集合である； *Con* は定数の集合である。

-- *Rel* は n 項関係記号の集合である (n は任意の自然数)。

-- *Ag* は主体 (*Agens*) 記号の集合である。¹⁶

-- *Evi* は証拠記号の集合である。

-- $\mathcal{L}_{A,\Delta}$ の整式 (*wohlgeformte Formel*):

$\varphi ::= R(t_1, \dots, t_n) \mid \Delta_a \varphi \mid \text{FUT} \varphi \mid \text{PST} \varphi \mid \Box_a \varphi \mid \varphi \rightarrow \psi \mid (\text{IF}_a \varphi_1) \varphi_2 \mid \forall x. \varphi \mid \perp$

ただし $t_1, \dots, t_n \in \text{Var} \cup \text{Con}$, $x \in \text{Var}$, $a \in \text{Ag}$ であり、 φ_2 は $\Box_a \varphi$ あるいは $\Delta_a \varphi$ という形の整式である。

-- 略記

$\neg \varphi \equiv \varphi \rightarrow \perp$

$\varphi_1 \wedge \varphi_2 \equiv \neg (\varphi_1 \rightarrow \neg \varphi_2)$

- モデル

以下を満たすような $\mathcal{M} = \langle W, T, \langle D, A, I \rangle \rangle$ が $\mathcal{L}_{A,\Delta}$ のモデルである。

-- W は空でない可能世界の集合； T は離散的な全順序 \langle を伴う時点の集合；

-- D は個体 (*Individuen*) の集合； A は空でない主体の集合 ($A \subseteq D$)；

-- 任意の $w \in W$ と $t \in T$ について、 $I(w)(t)$ は以下を満たす解釈関数である：
 n 項関係記号をそれぞれ、ある個体間の n 項関係 ($\subseteq D^n$) に写し、定数、主体記号および証拠記号をそれぞれ、ある個体に写す。

- g は変数の割り当て関数: $\text{Var} \rightarrow D$ である。

- e は Kratzer (1976) の言うところの会話の背景 (*Redehintergrund*) の確率的な表現であり、 A, Evi, T, W から認識的確率空間 (*epistemische Wahrscheinlichkeitsräume*) への関数である。¹⁷ 認識的確率空間は、世界の集合 $E (\subseteq W)$ と以下の条件を満

¹⁵ ただし、この確率は特定の証拠のソース (式中の i に対応) にセンシティブであるため、そのようなソース i と、様々なソースを統合した、総合的な主観確率との関係を述べる必要がある。具体的な定式化は今後の課題としたい。

¹⁶ 主体記号は、*drohen* の使用において問題となる視点をもつ個体を指示するために用いられる。

¹⁷ このような確率的オペレータの扱いは Yalcin (2010: 926) の分析を拡張したものである。

たす関数 $Pr: pow(E) \rightarrow [0, 1]$ からなる対 $\langle E, Pr \rangle$ である :¹⁸

I. $Pr(E) = 1$

II. $Pr(p \cup q) = Pr(p) + Pr(q)$ ($p \cap q = \emptyset$ のとき) .

--記法: $\langle E_{e(w)(t)(i)(a)}, Pr_{e(w)(t)(i)(a)} \rangle := e(w)(t)(i)(a)$

- 整式の外延 $\| \cdot \|_{\mathcal{M}, t, e, g}$

$\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g} = \{w \mid \mathcal{M}, w, t, e, g \models \varphi\}$

- 含意関係 \models

(i) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models R(t_1, \dots, t_n)$ gdw. $\langle \|t_1\|^g, \dots, \|t_n\|^g \rangle \in I(w)(t)(R)$,

ただし $\|t_i\|^g = g(t_i)$ ($t_i \in Var$ のとき)

$I(w)(t)(t_i)$ ($t_i \in Con$ のとき)

(ii) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models \varphi_1 \rightarrow \varphi_2$ gdw. $\mathcal{M}, w, t, e, g \models \varphi_1$ から $\mathcal{M}, w, t, e, g \models \varphi_2$ が帰結

(iii) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models PST\varphi$

gdw. 以下のような $s \in T$ が存在する : $s < t$ かつ $\mathcal{M}, w, s, g \models \varphi$

(iv) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models FUT\varphi$

gdw. 以下のような $s \in T$ が存在する : $t < s$ かつ $\mathcal{M}, w, s, g \models \varphi$

(v) $\mathcal{M}, w, t, e, g \neq \perp$ は全ての w, t, e, g について成立する。

(vi) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models \Box_a \varphi$ gdw. 全ての $w' \in E_{e(w)(t)(I(w)(t)(a))}$ に対して : $\mathcal{M}, w', t, e, g \models \varphi$

(vii) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models \Delta_a \varphi$

gdw. 文脈で与えられた基準 θ ($0 < \theta < 1$) に対して $\theta <$

$Pr_{e(w)(t)(I(w)(t)(i)(I(w)(t)(a))}(\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g})$ であり、かつ以下のような $s \in T$ が

存在する : $s < t$ であり、 $Pr_{e(w)(s)(I(w)(t)(i)(I(w)(t)(a))}(\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g}) <$

$Pr_{e(w)(t)(I(w)(t)(i)(I(w)(t)(a))}(\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g})$ であり、かつ、 $s \leq t' < t'' \leq t$ となる

ような全ての $t', t'' \in T$ に対して : $Pr_{e(w)(t')(I(w)(t)(i)(I(w)(t)(a))}(\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g}) \leq$

$Pr_{e(w)(t'')(I(w)(t)(i)(I(w)(t)(a))}(\| \varphi \|_{\mathcal{M}, t, e, g})$

(viii) $\mathcal{M}, w, t, e, g \models (IF_a \varphi_1) \varphi_2$

gdw. $\mathcal{M}, w, t, e^{\varphi_1}, g \models \varphi_2$ (φ_2 は $\Box_a \varphi$ あるいは $\Delta_a \varphi$ という形の整式)

ただし $e(w)(t)(i)(a) = \langle E, Pr \rangle$ としたとき $e^{\varphi_1}(w)(t)(i)(a) := \langle E^{\varphi_1}, Pr^{\varphi_1} \rangle$

で、 E^{φ_1} は E 中の φ_1 が成立する世界の集合であり、 Pr^{φ_1} は Pr を基にした

φ_1 という条件下での条件付き確率関数である。

5. 結論

ある表現に証拠性と時間性という複数の機能範疇に関わる意味を認めるとい

¹⁸ Pr の終域は実数上の区間 $[0, 1]$ であるため、それがとりうる値の間には通常の意味での大小比較 ($<, \leq$) が可能であるが、時点の間に成り立つ先行関係 ($<, \leq$) と記法の上では区別していないことに注意。

う本論の提案が正しければ、その表現を1つの機能範疇に位置づけるような分析(z.B. Jędrzejowski 2017)あるいは、機能範疇に一般的な意味を負わせる分析(z.B. Stowell 1996, Demirdache & Uribe-Etxebarria 2007, Speas 2010)の、少なくとも一方にとって問題となりうるケースを呈示することになる。このことは統語構造と意味解釈の対応関係が必ずしも自明でないことを示しており、(合成)意味論的な観点から、可能なカートグラフィー分析の幅に制約を与える例であるといえる。このことはカートグラフィーという枠組み自体にとって直ちに打撃になるものではないが、意味解釈を豊かな統語構造で汲みつくそうという方向性に対しては明確な異議を唱えることになる。

謝辞

本稿は、日本独文学会 2019 年春季研究発表会でのシンポジウム「統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程」における口頭発表に基づいている。また、この発表は *Germanistische Linguistik zwischen Köln und Tokio 3* (2018 年 1 月) での口頭発表を更に発展させたものである。それぞれの発表会の参加者に感謝したい。ドイツ語データの判断については、とりわけ Frauke Buscher 氏 (テュービンゲン大学) に感謝する。最後に、本稿の草稿については伊藤克将氏 (国立国語研究所) から有益なコメントを頂いた。このことにも感謝を記す。

参考文献

- Cinque, G. (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Colomo, K. (2011). *Modalität im Verbalkomplex*. Ph.D. Dissertation, Ruhr-Universität Bochum.
- Das Deutsche Referenzkorpus (DeReKo)*. Das Institut für Deutsche Sprache, Mannheim. Retrieved from <http://www.ids-mannheim.de/kl/projekte/korpora/>
- Demirdache, H. & Uribe-Etxebarria, M. (2007). The syntax of time arguments. *Lingua* 117, 330-366.
- Dowty, D. (1977). Towards a semantic analysis of verb aspect and the English imperfective progressive. *Linguistics and Philosophy* 1, 45-77.
- Dowty, D. (1979). *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: D. Reidel.
- Eisenberg, P. (1999). *Grundriss der deutschen Grammatik. Der Satz*. Stuttgart: Metzler.
- von Fintel, K. & Heim, I. (2011). Intensional semantics. Manuskript, MIT. Retrieved from <http://mit.edu/fintel/fintel-heim-intensional.pdf>

- Haider, H. (1993). *Deutsche Syntax – generativ. Vorstudien zu einer Theorie der projektiven Grammatik*. Tübingen: Narr.
- Kratzer, A. (1976). Was können und müssen bedeuten können müssen. *Linguistische Berichte* 42, 128–160.
- Jędrzejowski, Ł. (2017). On the grammaticalization of temporal-aspectual heads: The case of German *versprechen* ‘promise’. In: É. Mathieu & R. Truswell (Eds.), *Micro-change and Macro-change in Diachronic Syntax* (pp. 255-279). Oxford: Oxford University Press.
- Landman, F. (1992). The progressive. *Natural Language Semantics* 1, 1-32.
- McCready, E. & Ogata, N. (2007). Evidentiality, modality and probability. *Linguistics and Philosophy* 30 (2), 147-206.
- Portner, P. (1998). The progressive in modal semantics. *Language* 74 (4), 760-787.
- Portner, P. (2011). Perfect and progressive. In C. Maienborn, K. von Stechow, & P. Portner (Eds.), *Semantics: An international handbook of natural language meaning, vol. 1* (pp. 1217-1261). Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Potts, C. (2005). *The logic of conventional implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Reis, M. (2005). Zur Grammatik der sog. Halbmodale drohen/versprechen + Infinitiv. In: F. d’Avis (Ed.), *Deutsche Syntax: Empirie und Theorie* (pp. 125-145.). Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- Reis, M. (2007). Modals, so-called semi-modals, and grammaticalization in German. *Interdisciplinary Journal for Germanic Linguistics and Semiotic Analysis* 12, 1-57.
- Speas, P. (2010). Evidentials as generalized functional heads. In: A. M. Di Sciullo and V. Hill (Eds.), *Edges, heads and projections: interface properties* (pp. 127-150). Amsterdam: John Benjamins.
- Stowell, T. (1996). The phrase structure of tense. In: L. Zaring & J. Rooryck (Eds), *Phrase Structure and Lexicon* (pp. 277-291). Dordrecht: Kluwer.
- Yalcin, S. (2010). Probability operators. *Philosophy Compass* 5/11, 916-937.

ドイツ語 *schon* に基づいた日本語「もう」の分析

宮田瑞穂・森芳樹

1. はじめに

ドイツ語の小詞 *schon* の意味については、König (1977)、Löbner (1987, 1989)、Mittwoch (1993)、Zimmermann (2018)、など様々な議論がある。それらにおいて、*schon* には時間的用法、非時間的用法、いわゆる心態詞(modal particle)に分類されるモーダル用法の、主に3つの用法があるとされてきた。また、多くの先行研究では、*schon* は文、もしくは文中の一部をフォーカスに取り、それについてスケールを導入するスケール詞であると分析されている。

対して、*schon* に当たる日本語の副詞である「もう」に関しては、森田 (1989)、池田 (1999)、仁田 (2002)、渡辺 (2002)、小出 (2017) などに議論がみられる。その中で、「もう」は基本的には時間的な用法を持つが、数量詞を修飾する用法、また感情を表す感動詞的用法など、その用法は多岐に渡ることが示されている。

これらを踏まえ、本稿の目的は、第一にドイツ語の *schon* と日本語の「もう」について、その用法の異同を示すことである。第二に、*schon* の意味として議論されている「スケール詞」という概念を導入することによって、これまであまり議論がなされてこなかった「もう」の多岐に渡る用法の関連について、一貫した形で説明を提示できることを示すことである。

以下は本稿の流れである。初めに、2 節で *schon* と「もう」の用法を整理し、それらの相違を示す。3 節では、「もう」のスコープについて検討する。4 節では、これまでの議論を踏まえて、「もう」が *schon* と同様にスケールを導入するスケール詞であることを示し、それらが「もう」の用法にどのような作用を与えるかを説明する。5 節は全体のまとめである。

2. *schon* と「もう」の用法

この節では、*schon* と「もう」について、先行研究で示されている用法を整理し、大きく時間的用法、非時間的用法、モーダル用法に分け、それぞれに対応する *schon* と「もう」の用例を示す。その過程において、*schon* と「もう」の用法の異同を明らかにする。

2. 1 時間的用法

Löbner (1989)によると、*schon* の時間的用法は大きく3つのタイプに分類される。タイプ1は、*schon* が不完結相(imperfective aspect)である文をスコープに取るものである(p. 173)。以下に例文を示す。

(1) Das Licht ist schon an. (ibid.: 170)

タイプ1の *schon* の用法は、日本語の「もう」にも見られる。森田 (1989)、仁田 (2002)、渡辺 (2002)、小出 (2017)などの大半の先行研究では、このタイプの「もう」の用法が最も基本的な用法であると述べている。

- (2) a. 電気がもうついている
b. 今からではもう遅い (森田 1989: 439)
c. もうお腹がいっぱいだ (小出 2017: 4)

タイプ2の用法では、*schon* は焦点的文演算子(focusing sentential operator)であると分析できる。タイプ1の用法と同じように *schon* は文全体をスコープに取るが、文の中のある要素をフォーカスに取り、その要素の言語的な文脈がスケールを伴う、時間に依存した関数を規定する(Löbner 1989: 185)。(3)では、*schon* は *fünf* をフォーカスに取り、子供の人数に関する関数を規定している。

(3) Sie hat schon fünf Kinder. (ibid.: 184)

ドイツ語同様、「もう」にもこのタイプの用法が見られる。

(4) 彼女はもう5人の子供がいる

タイプ3の用法は、タイプ1、タイプ2と異なり、完結相(perfective aspect)を持つ文とともに用いられる *schon* の用法である。この用法では、*schon* はタイプ2と同じく焦点的文演算子であるが、文の中の、いわゆる時の副詞(temporal frame adverbial)をフォーカスに取る(Löbner 1989: 192)。(5)では、*schon* は *morgen* という副詞をフォーカスに取っている。「もう」にもこのタイプの用法が見られる。

(5) Er kommt schon morgen in Frankfurt an.

(6) 彼はもう明日にはフランクフルトに到着する

最後に、「もう」の研究でよく指摘される時間的用法が存在する。それは、未実現の事柄をフォーカスに取り、その事柄が近々成立するだろうという予測を述べる(小出 2017: 3)用法である。以下に例文を挙げる。この用法は、Löbner (1989)では取り上げられていないものの *schon* にも見られる。

(7) a. もう帰ってくるころだ (小出 op cit.: 3)

- b. 荷物はもう（すぐ）届くだろう （森田 1989: 439）
(8) Er kommt schon.

このように時間的用法では、*schon* と「もう」はほぼ対応関係を示している。

2. 2 非時間的用法

König (1977)によると、*schon* の時間的な用法は、文中で述べられている事柄が変化し得るものである場合にのみ適用される(p. 183)。そのため、述べられている事柄が変化し得ないと解釈される場合は、*schon* は非時間的用法として解釈される。

König (1977)、Löbner (1989)ともに、非時間的用法として2つの例を挙げている。一つは、Löbnerがいうところの場所的用法(local use)である。以下に例を挙げる。

- (9) a. Dumfries liegt schon in Schottland. (König op. cit.: 183)
b. Mexiko liegt schon in den Sudtropen. (Löbner op. cit.: 205)
c. Schon oberhalb 2000m wachsen keine Bäume mehr. (idem.)

例えば、スコットランドの領土について話している場合に(9a)を用いると、ダンフリースはイングランドではなく、スコットランドの領土の中であるという非時間的用法として解釈される¹。(9)を日本語の「もう」を用いて表現する場合、場所的用法への解釈も不可能ではない。しかしながら、(10a,b)では、時間的用法への解釈が優先される傾向にある。また、(10c)は、時間的用法への解釈もやや不自然である。

- (10) a. ?ダンフリースはもうスコットランドにある
b. ?メキシコはもう亜熱帯にある
c. ??木は標高 2000m を越えるともう、育つことはない

2つ目は、次のように、時間ではなく、別の基準（政治的態度、車のクラス、ブランド力）などを定め、それらに沿ってスケールが作られる用法が挙げられる(Löbner 1989: 204)。

- (11) a. Paul ist noch gemäßigt, Peter ist schon radikal. (König op. cit.: 183)
b. Das ist schon ein Mittelklassewagen. (Löbner loc.cit.)

¹ しかしながら、スコットランドの国家主義者がイングランドとスコットランドの法的な境界について議論を始める際に(9a)を用いた場合、時間的用法にも解釈される(König 1997: 184)。

c. Schon ein Mercedes würde sie zufriedenstellen. (idem.)

このような用法は、「もう」にもみられる。しかしながら、(12)を見ると、やはり「もう」は時間的用法への解釈が優先される傾向にある。(12a)の場合、「まだ」は比較の副詞としての用法があるため(渡辺 2002: 155)、非時間的解釈が可能であるが、「もう」は時間軸に沿った形で、歳を取るにつれてペーターの政治的態度が穏健派から急進派へ変化したという読みが優先される。

- (12) a. パウルはまだ穏健派だが、ペーターはもう急進派だ
b. これはもうミドルクラスの車だ
c. ベンツ (メルセデス) はもう彼女を満足させられるだろう

さらに、「もう」には数量詞を修飾し累加的な意味を表す場合がある²。興味深いことに、この場合「もう」に対応するのは *schon* ではなく、*noch* である。

- (13) a. もう一回やろう (森田 1989: 440)
b. もう 500 万円あれば、活動資金は十分でございます
(渡辺 2002: 141)
- (14) a. Paul trank noch ein Bier. (König 1977: 196)³
b. Ich kenne noch einen Mann, der fließend russisch spricht. (idem.)

2. 3 モーダル用法

上記とは別に、*schon* はいわゆる心態詞(modal particle)⁴に分類される用法がある。心態詞とは、モダリティに関わる小詞のことを指す。Ormelius-Sandblom (1997)によると、モダリティとは、話者が発話の内容に対しての関りを示す方法のことである(p. 104)。心態詞としての *schon* は、様々な機能を持つ。例として、話者の断定を弱める機能(15)、相手に対する反論を表現する機能(16)が挙げられ

² 渡辺 (2002)では、この数量詞を修飾する用法も、現在の量から増減の変化が加わって予定量に達するという点に着目し、「数量にかかわる用法だと言いながら、やはり時間がらみのなのです(p.142)」と述べている。しかし、後に述べるように(4. 3 節)、この用法は数量を時間的に捉えずとも分析できるとい点で、非時間的用法に分類した。

³ この場合、英語でも *already* ではなく *still* を用いることがある。

⁴ そのほか、心態詞一般の意味論・語用論的特徴として、Herrmann (2013)は以下の 4 つを挙げている。

- (i) a. 非真理条件的である
b. 文の発話内の力を修飾する
c. 命題に対しての話者の態度を表現する
d. 主に会話の相手に向けられる

る。また命令文に現れる場合は、要求を強める機能(17)や、安心の態度を表現する機能(18)を持つ。

- (15) A: Das ist aber ein schönes Haus.
B: Schön ist es schon, (aber der Keller ist leider ziemlich feucht.)
(Ormelius-Sandblom op. cit.: 116)
- (16) A: What do you think about St. Pauli? They aren't good team, are they?
B: Doch! Das ist schon 'n gutes Team. Auch wenn sie oft verlieren.
(Zimmermann 2018: 688)
- (17) Na komm schon endlich! (Ormelius-Sandblom 1997: 119)
- (18) A: Treibst du dich wieder mit Aiwa herum, was?
B: Geh schon ruhig zu ihr, ich komme gleich mit einer Rund Met.
(Zimmermann op. cit.: 717)

上記のような心態詞 *schon* に対応する用法は、「もう」には見られない。しかしながら、話者の態度・感情を表現する用法は「もう」にもある。一つは、心情形容詞と共起し、それが表す心情が話者の心情状態の限界を超えていることを表す用法である。この場合、「もう」は、ネガティブ感情を表す形容詞もポジティブな感情を表す形容詞も修飾することができる。

- (19) a. もう憎くて憎くて、加害者の少年を殺してやりたいぐらいです
(渡辺 2002: 144)
- b. このアイスクリーム、もう、最高 (小出 2017: 5)

対して、「もう」単独で用いられる場合、話者の感情、特に苛立ちや非難などのネガティブな感情を表す。この場合の「もう」は、副詞的な用法から派生した、感動詞的な用法とみるのが妥当であると考えられる。

- (20) あなたってひとはもう！ (ibid.: 6)

2 節では、*schon* と「もう」の用法について、それぞれ比較しつつ整理をした。これまでの結論としては、「もう」は *schon* と同様に時間的用法、非時間的用法、モーダル用法の大きく分けて 3 つの用法を持つ。時間的用法と非時間的用法に関して、*schon* は非時間的用法への拡張が広い範囲で起こっているが、「もう」はその拡張が薄く、時間的な解釈が優勢である。また、モーダル用法は、*schon* と「もう」で違いがはっきり見られる用法である。

3. 真理条件との関わり —テストおよび「もう」のスコープについて—

この節では、主に *schon* と対応関係にある時間的用法の「もう」と命題の真理条件の関りについて検討する。Zimmermann (2018)によると、*schon* は、それが含まれている発話の解釈に対して非争点的意味(not at-issue meaning)として貢献する(p. 693)。非争点的意味とは、文字通り、争点的意味(at-issue meaning)ではない意味のことである。争点的意味とは、フレーゲの言う”Sinn”や、グライスの言う「言われること(what is said)」に対応するもので、主に「真理条件的内容(truth-conditional content)」を指す(Potts 2015)。すなわち非争点的意味とは、前提や含意などの非真理条件的内容を指す。

日本語の副詞に関する研究において、中右 (1980)では副詞を命題的内容にかかわるかという観点で分類している。その中では、「もう」は命題内容にかかわる副詞に分類されている。しかしながら、*schon* は真理条件的内容にかかわらない非争点的意味を担う副詞だと分析されている(Zimmermann 2018)。そこで「もう」に関してテストを行い、真理条件的に内容にかかわる争点的意味を担うかを明らかにする。

schon が非争点的意味に貢献しているということは、Zimmermann (2018)でテストされているので、それに沿う形で「もう」についてもテストを行う。*schon* の争点的意味と非争点的意味は以下のようになる。

(21) Eben hat noch die Sonne gescheinen. Jetzt regnet es schon.

at-issue: It's raining at t_0 .

not at-issue: It's wasn't raining before t_0 .

(ibid.: 693)

「もう」の場合は、(22)で示した通り同じように考えられる。

(22) さっきまで太陽が輝いていた。今はもう雨が降っている。

at-issue: 時点 t_0 には雨が降っている

not at-issue: 時点 t_0 より前に遡れば雨が降っていなかった

これらの文を外部否定節、条件節に埋め込んだ場合や、疑問文にした場合、*schon* と「もう」の非争点的意味はそれぞれの文の争点的意味のスコープに収まらない。例えば、(23a)の外部否定節への埋め込みの場合、否定しているのは副詞の争点的意味である「時点 t_0 には雨が降っている」である。副詞の非争点的意味である「時点 t_0 より前に遡れば雨が降っていなかった」ことは否定されておらず、外部否定節埋め込み文の非争点的意味に受け継がれている。

- (23) a. Es ist nicht der Fall, dass es schon regnet.
 at-issue: It's not raining at t_0 .
 not at-issue: It's wasn't raining before t_0 .
- b. Regnet es schon?
 at-issue: {It's raining at t_0 , It's not raining at t_0 }
 not at-issue: It's wasn't raining before t_0 .
- c. Falls es schon regnet, müssen wir uns beeilen.
 at-issue: If it's raining at t_0 , we have to hurry up.
 not at-issue: It wasn't raining before t_0 .
 (ibid.: 694)
- (24) a. もう雨が降っているということではない
 at-issue: 時点 t_0 に雨が降っていない
 not at-issue: 時点 t_0 より前に遡れば雨が降っていなかった
- b. もう雨が降っていますか?
 at-issue: {時点 t_0 に雨が降っている, 時点 t_0 に雨が降っていない}
 not at-issue: 時点 t_0 より前に遡れば雨が降っていなかった
- c. もう雨が降っているなら我々は急がなくてはならない
 at-issue: 時点 t_0 に雨が降っているなら我々は急がなくてはならない
 not at-issue: 時点 t_0 より前に遡れば雨が降っていなかった

そのため、時間的用法の「もう」も非争点的意味に貢献していると考えられる。

次に、モーダル用法の *schon*, 「もう」について考える。その場合、*schon* の争点的意味と非争点的意味は以下のようなになる。

- (25) St.Pauli ist schon ein gutes team. Aber sie haben kein Glück.
 at-issue: St. Pauli are a good team
 not at-issue: St. Pauli are rather a good team than not.
 (ibid.: 693)

モーダルな用法の「もう」の場合、非争点的意味は *schon* とは異なり、以下のよう示される。

- (26) もう嬉しくて、飛び跳ねました
 at-issue: 話し手は嬉しさを感じ、飛び跳ねた
 not at-issue: 話し手の感じている嬉しさは限度を超えているものだった

モーダルな *schon*, 「もう」が非争点的意味に貢献していることは、それを含む発

話に対して、*„Das stimmt ja gar nicht!“*（「それは違う」）と反論した場合、何に対する反論を行っているかというテストによって確かめられる。以下のテストは、非争点的意味の、直接否定することができないという特徴に基づいたものである(cf. Tonhauser 2012)。A の主張に対して、B が反論する場合、(27B)、(28B)のように争点的意味に対して反論することはできるが、(27B’)、(28B’)のように *schon* や「もう」が示す非争点的意味に対する反論を示すことはできない。⁵

- (27) A: St. Pauli ist schon ein gutes team. Aber sie haben kein Glück.
B: Das stimmt ja gar nicht. Die sind doch sauschlecht!
B’: #Das stimmt ja gar nicht! Es sprechen nicht mehr Faktoren dafür, dass sie gut sind, als dafür, dass sie schlecht sind.
(ibid.: 695)
- (28) A: もう嬉しくって、飛び跳ねました
B: それは違う。君は嬉しさを感じて、飛び跳ねてなんかいないよ！
B’: #それは違う。君の感じている嬉しさは限界を超えているものじゃないよ！

これらのテストから、時間的な用法、およびモーダルな用法ともに、*schon* と同じく「もう」は非争点的意味に貢献していることが明らかになった。

最後に、時間的な用法の「もう」のスコープについて考えたい。川端 (1965a,b) では、「もう」はアスペクト的言語層に呼応している陳述副詞であることを強調している⁶。また、英語の *still*、*already* について分析している Ippolito (2007) では、それらの副詞がアスペクト句(AspP)をスコープに取っていることを示している。そのため、時間的な意味を持つ「もう」で、かつ運動動詞と共起する場合は、アスペクト句をスコープに取ると考える。簡潔に図に表すと以下のようなになる。

⁵ Zimmermann(2018)によると、時間的な用法の *schon* とモーダルな用法の *schon* とで異なるテストを用いているのは、モーダルな用法の *schon* が持つ肯定極性の効果によって、否定文や疑問文に埋め込んだ場合、主節と *schon* が意味の不一致を起こし、文自体が非文になってしまうからである(p. 694)。実際、モーダルな *schon* を外部否定節に埋め込んだ以下の文は非文となる。

(i) *Es ist nicht der Fall, dass St.Pauli schon ein gutes Team ist.

⁶ 陳述副詞という名称は山田 (1936)による名で、文の陳述に呼応する副詞であると特徴づけられている。また渡辺 (1971)では、陳述副詞を「誘導副詞」と名付け、文の知的内容に影響を及ぼさないことを指摘している (p. 317)。この記述は「もう」が非争点的意味に貢献する副詞であるが故、陳述副詞として分類できることの傍証となる。

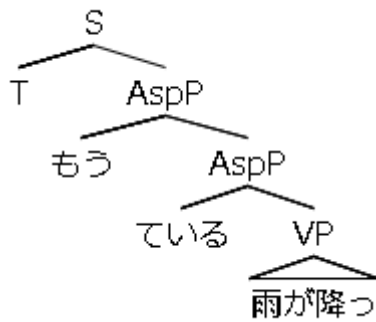


図 1 「もう雨が降っている」の統語構造

モーダルな用法の *schon*、「もう」については、それらが修飾している語句だけではなく、それらを除いた命題全体をスコープに取っていると考えられる。それが厳密にどのような統語範疇であるかは、今後の課題とする。

4. *schon* に基づく「もう」の意味構造—スケールを取る副詞—

3 節では、「もう」が *schon* と同様に非争点的意味に関わる副詞であることを明らかにした。4 節では、「もう」の意味について、*schon* をもとに、スケールを導入する副詞として考え、そのことによって「もう」の用法に対して一貫した説明ができることを示す。

4. 1 「もう」の基本スケール

「もう」の基本的な意味は、「発話時 t_e に成り立つ P に先行する $\sim P$ が存在することを前提として導入する」というものである。言い換えると、 $\langle \sim P, P \rangle$ のスケールを前提として導入するという意味を持つ。これは、Löbner (1989) で提唱されている *schon* の基本的な意味と同様であると考えている。Löbner (1989) は、次の図を用いて *schon* の意味を説明している。

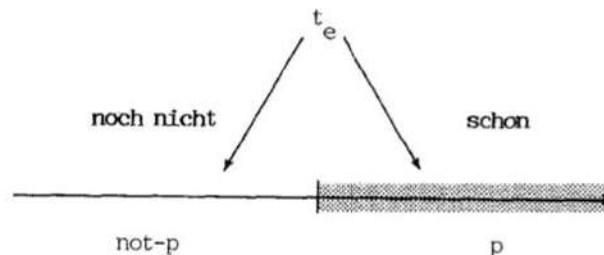


図 2 Löbner (op. cit.:173)

「もう」も同様に、それがスコープに取る命題 P の否定事態 $\sim P$ が存在することを前提として導入すると考える。つまり、「もう」は $\sim P$ から P への状態の移行を前提とする。これは、池田 (1999) が示した「もう」の意味とも一致する。池田は、「もう」は時間とともに変化する、状態 α から状態 β への移行を前提とするとしていたが、その状態 α と β は無関係ではなく、P から $\sim P$ への移行である。図に示すと、図 3 のようになる。このスケールを、「移行型スケール」と呼ぶ。

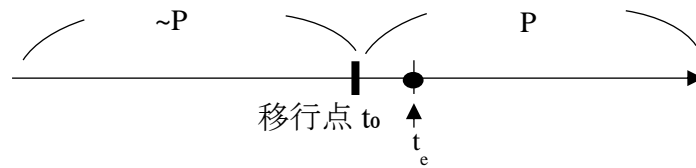


図 3 「もう」の基本スケール

このような状態の移行を前提とする「もう」の意味構造から、状態述語と「もう」が共起する以下の用法が生まれる。

- (29) a. もう彼の頭は白い
 b. 太郎はもう 3 歳だ
 c. 太郎はもうここにいる
 d. 足が痛くてもう歩けない
- (30) a. ?ダンフリースはもうスコットランドにある
 b. ペーターはまだ穏健派だが、パウルはもう急進派だ

基本的に、図 3 の軸は時間の流れを示しているが、(30)のような非時間的用法の場合はその軸が地図上の距離やある状態の程度を表していると考えれば、それぞれの用法の説明がつく。

4. 2 アスペクト構造との呼応

「もう」と運動動詞が共起する場合は、動詞の形態、意味によって以下の 3 つに分類される。

- (31) a. もうこの仕事は{済んだ/済んでいる} 【完了】
 b. もう太郎は走っている 【進行中】
 c. もう荷物が届く 【予測】

3.2 節では、Ippolito (2007)に従い、時間的な意味を表す「もう」がアスペクト句をスコープにとると仮定した。それに伴い、(31)のように運動動詞と「もう」が共起する場合は、「もう」の基本スケールが動詞の表すアスペクトと重なることによってそれぞれの文の意味が導出されると考える。本稿では、コムリー (1988) を参考にし、アスペクト構造を図 4 のように仮定する。

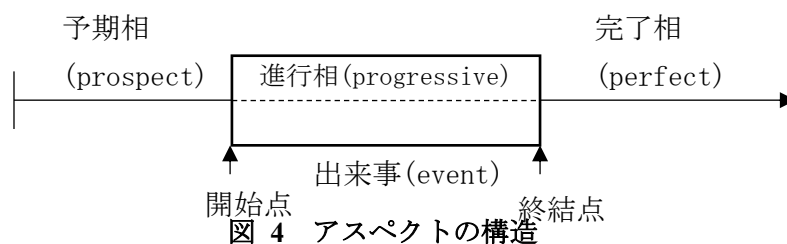


図 4 アスペクトの構造

アスペクトは、動詞によって表される出来事(event)の開始点と終結点により3つに分割される。ある時点から開始時点までを表すアスペクトを、予期相(prospect)と呼ぶ。これは、日本語では「～しそうだ」や「～するところだ」などで表されるアスペクトである。また、出来事の開始点と終結点の間を表すアスペクトを進行相(progressive)と呼ぶ。最後に、出来事の終結点から始まるアスペクトを、完了相(perfect)と呼ぶ。

このアスペクトの構造と「もう」の基本スケールである図3の重なりによって、(31)で示した3つの意味を統一的に説明できる。まず、(31a)のように現在完了の場合は、動詞の過去形(タ形)、もしくは Vendler (1967)の分類でいう到達動詞(achievement verb)のテイル形と「もう」が共起する場合である。この場合、図3の移行点 t_0 と、図4の出来事が重なることによって、 t_e が完了相の軸上に位置される。それにより、現在完了の意味が読み取れる。

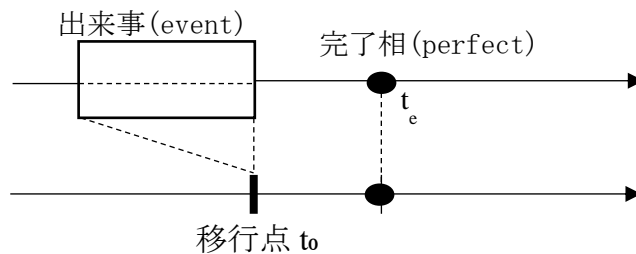


図5 完了の場合

次に、(34b)の文のように、進行中の意味が読み取れるのは活動動詞(active verb)もしくは、達成動詞(accomplishment verb)のテイル形と「もう」が共起する場合である。この場合、図3の移行点 t_0 と、図4の開始点が重なることによって、 t_e が進行相の軸上に位置され、現在進行の意味が生じる

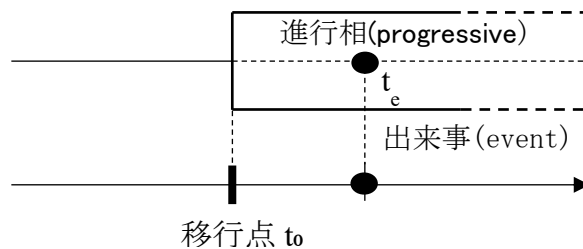


図6 進行中の場合

最後に、(31c)の予測の意味が生じるのは、運動動詞のル形と「もう」が共起する場合である。この場合、図3の移行点 t_0 と、図4の予期相の開始点が重なることによって、 t_e が予期相の軸上に位置され、現在からみた予測の意味が生じる。

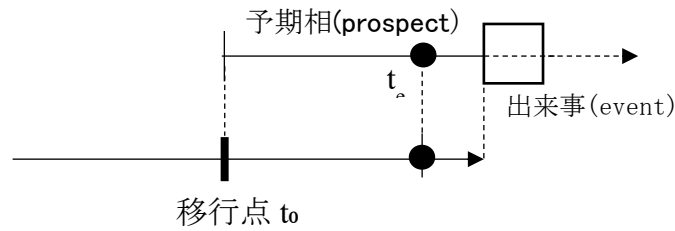


図 7 予測の場合

この場合、他の2つとは異なり、 t_e が位置することのできる最大値が決められている。それは、出来事の開始である。このようなスケールを、最大値スケールと呼ぶ。予期相を表す「もう」のスケールは、移行型スケールの特徴も持ち合わせていながら、最大値スケールを導入する。この最大値スケールは、「未実現」という意味と結びついているように思われる。それは、以下で述べる通り数量詞を修飾する「もう」も最大値スケールから派生されたものであるからである。

このように、アスペクトの構造と、「もう」の基本スケールとの重なり方によって、運動動詞述語と「もう」が共起する場合に生じる意味の違いを説明することができる。

4. 3 モーダル用法

モーダル用法の「もう」についても、図3で示した基本スケールを基に説明できる。モーダル用法では、非時間的用法と同様に、スケールの軸が時間の流れではなく、話者の感情の程度と考えることができる。そのうえで、発話時の話者の感情の程度が、話者が感じる限界を超えるほど大きいことを示す。図に表すと以下のようなになる。

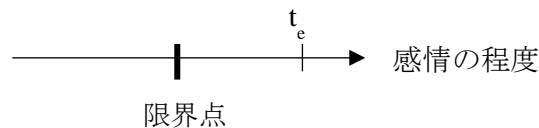


図 8 モーダル用法のスケール

つまり、時間的用法では時間軸を基にスケールを形成していたが、その軸が時間軸のみではなく、距離や感情を基にすることで形成されることが可能になったと考えられる。さらに、「もう」単独で用いる場合には、ネガティブな感情という特定の軸を基にスケールが形成される。この変化は、文法化によるものではないかと考えられる。Ormelius-Sandblom (1997)では、心態詞 *schon* は時間的な副詞 *schon* から文法化を経て派生されたものと述べている(p. 98)⁷。

⁷ Ormelius-Sandblom (1997)は、*schon* の文法化の過程を次のように示している(p. 100)。時間副詞の *schon* は「時間的完了」を表す。しかし、それが動詞(句)の未来形と結びついた場合、未来の表現と時間的完了の意味の齟齬が生まれ、会話の含意としてその発話であらわされている事態が起こるだろう可能性が高いことが導かれる。その含意が *schon* の意味としてコード化された結果、心態詞 *schon* の用法に派生したということである。

心熊詞としての *schon* の場合は、上記で説明したスケールとは異なるスケールを導入する。Zimmermann (2018)によると、*schon(p)*は $\neg p$ と p を支持する証拠の数を比べ、 p を支持する証拠の方が多い（または価値が重い）という、極性スケールを導入する。このスケールは、「もう」にはないように思われる。その結果、心熊詞としての *schon* と、モーダル用法の「もう」の用法の違いが生まれている。これは、ドイツ語の時間副詞から心熊詞への文法化の過程（注7参照）と、日本語の時間副詞から感動詞への文法化の過程に際して、基準にするスケールが異なることに由来するのではないかと考える。しかしながら、この点に関してはさらなる検討も加えて今後の課題とする。

4. 4 最大値スケールの派生

4.2 節で、「もう荷物は届く」のように予想を述べる文では、「もう」が導入する最大値スケールによってその意味が生じるということを説明した。この最大値スケールは、他の「もう」の用法にもあてはまる。それは、2.2 節で示した、「もう」が数量詞を修飾する場合である。

(32) もう 500 万円あれば十分です

この場合、最大値スケールの基準が時の流れではなく、数量詞で表されるものの必要量になっていると考えられる。(32)の場合、スケールの最大値は、金額の必要量の最大値、つまり「発話時の金額+500万円」に定まり、「もう」によって発話時の金額と必要量の最大値の差が示される。



図 9 「もう+数量詞」のスケール

最大値スケールを用いる「もう」の用法として共通しているのは、先にも述べたが「未実現」という意味と結びついていることである。

4. 5 移行型スケールと最大値スケール

ここまで「もう」のそれぞれの用法について分析し、「もう」は移行型スケールを基盤とするが、未実現の表現の場合は最大値スケールへの派生が見られることを明らかにした。対して、*schon* が導入するスケールに関しては、時間的用法、非時間的用法に関して、移行型スケールと最大値スケールのどちらを採用するかで意見が分かれている。4. 1 節で示した通り、Löbner (1989)は移行型スケールを採用しているが、König (1977)、Zimmermann (2018)は最大値スケールを基本

としている。例として、Zimmermann (2018)では、‘*schon*(P)’において~P から P への移行が見られる場合、発話時の状態は〈~P, P〉の順で並ぶスケールの最大値、つまり P の状態にあると分析している。

しかし、「もう」について分析を行うに当たっては、移行型スケールと最大値型スケールの二つの種類のスケールを想定する必要があると考える。というのも、(33)のように、述べられる事態が変わりうるものではない場合、「もう」を用いることができないからである。

(33) *彼はもう日本生まれだ (仁田 2002: 256)

すなわち、移行前の状態が想定できない場合は、「もう」を用いることができない。このため、「もう」は移行型スケールを基本としていると考えられ、最大値スケールは移行型スケールから派生したものだと考えられる。

5. おわりに

本稿では、ドイツ語の *schon* についてなされてきた分析の観点を取り入れることによって、日本語の「もう」の様々な用法について、それらの関連について示すことを目的とした。したがって、*schon* が文全体をスコープに取り、文自体もしくはある文中のある要素を焦点としてそれについてスケールを導入するスケール詞であるという提案に基づき、「もう」の用法を分析した。その結果、「もう」の持つ用法それぞれは無関係ではなく、あるスケールを導入するという点では共通していることが明らかになった。

本稿で十分に分析できなかった点が2点ある。1点は、*schon* は時間的用法から非時間的用法への拡張が見られるが、「もう」はその拡張が弱いという事実である。また1点は、「もう」には数量詞を修飾する用法があるが、それに対応するドイツ語は *schon* ではなく *noch* であるという点である。この点に関しては、日本語でも「もう 500 万円必要だ」と「まだ 500 万円必要だ」が同じ状況を表すことができるという事実も含めて、*schon* と *noch*、「もう」と「まだ」、そして二言語間の関係を深く考察することが必要である。このことを鑑み、これらを今後の課題とする。

参考文献

- コムリー, B. (1988). 『アスペクト』, むぎ書房.
Herrmann, A. (2013). *A Cross-Linguistic Study. Modal and Focus Particles in Sign Languages*. Berlin: De Gruyter.

- 池田英喜. (1999). 「もう」と「まだ」：状態の移行を前提とする 2 つの副詞」, 『阪大日本語研究』, 11, 19-35.
- Ippolito, M. (2007). On the meaning of some focus-sensitive particles. *Natural Language Semantics*, 15(1), 1-34.
- 川端善明. (1965a). 「時の副詞-上-」, 『國語國文』, 33(11), 1-23
- 川端善明. (1965b). 「時の副詞-下-」, 『國語國文』, 33(12), 34-54.
- König, E. (1977). Temporal and non-temporal uses of ‘noch’ and ‘schon’ in German. *Linguistics and Philosophy*, 1(2), 173-198.
- Löbner, S. (1987). Quantification as a Major Module of Natural Language Semantics. In *Studies in Discourse Representation and the Theory of Generalized Quantifiers*, Papers of the Fifth International Amsterdam Colloquium, 209-241, Dordrecht: Foris.
- Löbner, S. (1989). German Schon-Erst-Noch: An integrated analysis. *Linguistics and Philosophy*, 12, 167-212.
- Mittwoch, A. (1993). The relationship between schon/already and noch/still: reply to Löbner. *Natural Language Semantics*, 2, 71-82.
- 森田良行. (1989). 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 中右実. (1980). 「文副詞の比較」, 國廣哲彌編, 『日英語比較講座第 2 卷: 文法』 (pp. 157-219), 大修館書店.
- 仁田義雄. (2002). 『副詞的表現の諸相』, くろしお出版.
- Ormelius-Sandblom, E. (1997). The modal particle schon: Its syntax, semantics, and pragmatics. In Swan, T. & Jansen, O.,J., (Eds.) *Modality in Germanic Languages. Historical and Comparative Perspectives* (pp. 75-131). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Potts, C. (2015). Presupposition and Implicature. In S. Lappin & C. Fox (Eds.), *The Handbook of Contemporary Semantic Theory* (pp. 68-202). Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.
- Tonhauser, J. (2012). Diagnosing (not-) at-issue content. *Proceedings of Semantics of Under-Represented Languages of the Americas (SULA)*, 6, 239-254.
- Vendler, Z. (1967). Verb and Times. *Linguistics in Philosophy* (pp. 97-121). New York: Cornell University Press.
- 渡辺実. (1971). 『国語構文論』, 塙書房.
- 渡辺実. (2002). 『さすが！日本語』, 筑摩書房.
- 山田孝雄. (1936). 『日本文法概論』, 寶文館.
- Zimmermann, M. (2018). Wird Schon Stimmen! A Degree Operator Analysis of Schon. *Journal of Semantics*, 35, 687-739.

会議報告

既にまえがきで述べたように、本書に収められている論文は日本独文学会 2019 年春季研究発表会でのシンポジウム「統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程」における口頭発表に基づいている。シンポジウムでは伊藤克将、山崎祐人、藤井俊吾、岡野伸哉が発表者として登壇した。会場では発表内容に関して参加者の方々より貴重なご指摘を数多く頂いた。発表者一同、シンポジウムに参加して下さった方々に心から感謝する。

シンポジウムにおける個々の発表に関していただいたコメントについては、本書におけるそれぞれの論文の内容に反映されている。そこで本報告では、シンポジウムの全体テーマとの関連があるコメントについて述べることにする。

全体討論において、そもそもなぜ生成文法の枠組みを採用するのかという指摘がなされた。生成文法に限らず、言語理論を採用するメリットとして、反証が可能な仮説を提示できる点が挙げられる。基本的に言語理論に基づいた分析は、ある文が文法的となるかどうかを予測する。ゆえに、提案された分析による予測にとって例外となる言語データを示すことで、反証を行うことが可能となっているのである。Popper (1935; 1959)によって提唱された反証可能性という指針を考えると、文法性に関して明確な予測をする言語理論を用いることは大きな意味があると言えるであろう。また、生成文法の強みの一つとして、複数の言語現象を一般化し、単一のメカニズムへと還元することが可能であることが挙げられる。本シンポジウムにおける発表を例にとると、伊藤は事実性演算子によって、ドイツ語の事実性補文内における付加詞の抜き出しと項の話題化が共に禁止される理由を同時に説明しているし、山崎は固有名詞を分裂要素とする倒置語順の分裂文を、先行研究で指摘されている、ドイツ語において強調されている要素が前域に置かれる現象と比べて、双方とも **Emphasis Phrase** が関わっているという一般化ができることを指摘した。藤井による、ドイツ語の前置詞句のみからなる命令表現への **ForceP** の応用は、**PP** 領域と **CP** 領域の並行性を示唆しており、ドイツ語の言語構造におけるカテゴリー間の高い一般性を示すものである。もちろん、単一のメカニズムへの還元や一般化は生成文法のみが持つ特性ではないし、その妥当性をそのまま担保するわけではないが、このことをもって有効な言語分析の手段のひとつであるとみなすことは十分に可能であろう。

討論の中では、カートグラフィーの今後の見通しについても議題となった。伝統的に言語分析の対象となってきたトピックやフォーカスも含め、様々な談話機能を左方領域における機能範疇と対応付けることで、カートグラフィー分析は様々な言語現象をその分析の対象としてきた。語順といった統語構造の表層での実現だけではなく、心態詞の認可条件や意味解釈など、意味・談話により深

く関わる領域についても分析の射程に入れることで、理論の適用範囲を広げている。しかし分析対象を広げていくことによって、現状の枠組みでは説明できない事項も当然出てくる。例えば岡野は証拠性やアスペクトといった意味を、それに対応する機能範疇を設けることによって捉えようとするアプローチ一般に関して、統語的なツリーを描いてみせるだけでは不十分であると指摘した。例としては、テンス・アスペクト・時間副詞の意味を、機能範疇の指定部と補部によってそれぞれ指示される時間同士の関係で捉えようとする Demirdache & Uribe-Etxebarria (2007)について、どのように意味合成を進めれば意図された結果が得られるのかが自明ではないことを述べ、合成的意味論(kompositionale Semantik)を意識した分析の重要性を主張した。このように現状では機能範疇の設定や分析の精緻化に関して今後の課題とするところが大きいことも留意すべきであり、研究の積み重ねの中で現象の説明に必要な機能範疇が新たに加わったり、或いはより合理的な分析を目指す中で統合・廃止される機能範疇が出てくることも考えられる。

本シンポジウムはドイツ語研究におけるカートグラフィー分析の有効性とその限界を同時に描き出すことを目指した。およそ20年にわたるカートグラフィー分析の積み重ねの中で、それまで余り目を向けられてこなかった談話と統語構造の関連について多くの研究成果が得られているが、同時に課題も数多く残されている。カートグラフィー分析の枠組みが今後どのような形で変化していくにせよ、データに忠実に、そして反証可能な形で理論を発展させていくことが肝要であり、その限りにおいて言語学全体の発展に寄与することが見込まれると考えられる。

参考文献

- Demirdache, H. & Uribe-Etxebarria, M. (2007). The syntax of time arguments. *Lingua* 117, 330-366.
- Popper, K. R. (1935). *Logik der Forschung. Zur Erkenntnistheorie der modernen Naturwissenschaft*. Wien: Verlag Julius Springer.
- Popper, K. R. (1959). *Logic of Scientific Discovery*, New York: Basic Books

日本独文学会研究叢書 140号

2020年6月6日発行

© 2020 一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 140

Alle Rechte vorbehalten

©2020 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

統語と意味のインターフェイスをめぐって

—カートグラフィーの射程—

編集 森 芳 樹

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールフォーム <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-30-7